

---

# あきのにわ

天海 沙月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あきのにわ

### 【Nコード】

N4287A

### 【作者名】

天海 沙月

### 【あらすじ】

秋庭紅葉はとっつきにくくて、言葉は何故か敬語。趣味は読書の優等生系。そんな彼女との出会いから変わる、僕らの高校生活。

## プロローグ：告白と掃除当番

「…僕と…ッ付き合って下さいっ」

「は？」

「え」

「すみません、掃除当番なので後で良いですか？」

「ハイ…」

「それでは」

緊張して、緊張して、少し早口で言ってしまった初めての告白。  
それでも、僕の告白は彼女にとって掃除当番にも満たなかったら  
しい

## 第一話：マツチと笑顔

秋庭紅葉は長いサラサラのストレートに、赤い縁の眼鏡の、趣味は会話より読書。

言葉遣いは何故か敬語の、とっつきにくさ満点の女の子。

少なくとも、今日まではそうとしか思ってたなかった。

\*

「三本位いけたりして」

「もつと乗るんじゃない？」

その日、僕は中学からの悪友、坂下と大河内と学校から帰りながら、『脅威の数学教師・伊賀原のマユゲの上にマツチは何本乗るか』等という、実にどうでもいい話を真剣にしていた。

「伊賀原先生の眉毛を0.2mm、マツチの太さを0.15mmとして、そこに加わる眉間の深さを0.4mmと仮定して、計算：

┌

「分かった大河内。とても素晴らしい考え方だ」

本当は全然分からないけど。

必殺委員長・大河内が暴走する前に、僕は大河内の声を遮った。すると、近くから微かな笑い声。

いつもなら気にも留めない所だけど、なんとなく聞き覚えのある声だった。

声のする方を見ると、同じクラスの秋庭さんだった。

坂下も近くを誰かと一緒に歩く秋庭さんを見つけ、

「マジ？秋庭が笑ってる！？」

「本当だ。何か話しているようだね」

秋庭さんは滅多に笑わない。

秋庭さんはかなり可愛い部類に入るらしいから、もったいない事だ。

「珍しいね…秋庭さんが笑うのは、一日に一、二回として確率にして、」

僕は大河内を無視し、一緒にいる人と何か話しながら笑う秋庭さんを見る。

滅多に見ることのない、秋庭さんの笑顔は、やわらかく、少しはにかんだようでもあって、それでいて珍しく明るく、

とても 綺麗だった。

「あーやっていつも笑ってたらもっと可愛いのになあ、もったいねえ」

坂下の言葉も耳に入らない。

僕はずっと、見えなくなるまで秋庭さんから目をそらせられなかった。

何故だか僕は、

それから、

秋庭さんの事が気になって仕方がなかった。

## 第二話：気になるあの人とポケ

次の日、僕は秋庭さんが気になってろくに授業も聞けなかった。

まあ、普段もちゃんと聞いてないけど。気がつくと、目線が彼女を追っている。

逆に気づかれそうになったら、慌てて目を反らしたりして。

「どうしたんだよ、今日はポケっとしやがって」

「その通りだよ、日頃のポケ具合に更に拍車がかかっている。ポケの飽和状態だ」

待て。

そこまでポケ扱いか。

「まさか…恋！？恋なのお！？」

坂下が奇妙な裏声で言う。

かなり気持ち悪いぞ。

「それはないだろ」

僕が否定する前に大河内に否定された。

「何故お前が言う」

「まさかホントに恋とか言い出すの？」

「いや違う」

「だろ？君が恋等という物をするなんて天文学的数字だからね円周率を最後まで出すより難しいよ」

「永遠に無いと言いたいのか」

「そんなことは言っていないよ」

言っただろ。今。

「冗談だよ。大河内の言う通りだ。お前に本気で言う訳ないだろ」

坂下、お前はもう少しねばれ。

「だーっもう、お前らのせいで何やってたのかわかんなくなって来たっ」

僕は言う。

「お前が何かをやるような子じゃないって俺は信じてるぞ」

「信じるなそんなこと」

「あつヤベツ次地理じゃん」  
「ん？地理？」

地理の席は縦に出席番号順に並ぶ。

一列は六人で全部で七列の四十人。  
ということは。

二番の秋庭と、八番の上城かみしろは横に並ぶことになる。  
そう。

今まで気にしていなかったが、

僕は秋庭さんと隣の席になるのだ。

### 第三話：幼馴染みと消ゴム

地理教室に行く前に、わざと教室に教科書を置いてきた。秋庭さんに見せてもらおうと思って。

姑息な手段だが、僕にはいい作戦のように思えた。

「遅いつ！」

教室に入った瞬間、怒鳴られた。

「もうギリギリよ？大河内はともかく、蓮と坂下は先生に怒られたらヤバイでしょー！」

ゲッ

遙の怒声が飛ぶ。

「特に蓮！」

遙はビシツと僕を指さす。

「あんた教科書どうしたのよ？」

「ん？おおっ忘れて来た！」

わざとだけど。

「もしようがないから貸してあげるわよ」

遙がフンツと鼻を鳴らして言う。

「別に良いよ、第一お前はどうすんだ」

「あたしは隣に見せてもらおうわよ」

「だから僕も隣に…」

「だから！あんたは先生におこられたらヤバイんだってば！」

「あんたの幼馴染みとして！仕方なく助けてやろう、って言うてんのよー！」

遙は僕の幼馴染み。

だからどう、ってことはないけれど、最近遙は『幼馴染み』ということを強調するようになってきた気がする。なんでだろう？

「ちよっと蓮？聞いてんの？」

「聞いてるよ」

僕は答える。

「だったらさっさとこれ持って席に着きなさい」  
遙が乱暴に教科書を投げる。

僕はそれを片手で見事キャッチ：

し損ねて華麗に頭に激突。

どすっ

坂下と大河内に爆笑された。

「覚えてるよお前ら…」

丁度チャイムが鳴ったので、僕らはおとなしく席に着いた。  
不意ながら手にいれた教科書と共に。

遙め、余計な事を。

せっかく秋庭さんに見せてもらおうと思ったのに。

\*

秋庭さんが隣に。

それだけで何だか嬉しくて字を綺麗に書こうか、と思ったりした。  
前なら同じく隣でもこんなことはなかったのに。  
なんで…こんなに秋庭さんが気になるんだろう。

先生も珍しく静かな僕を不審に思って、

「保険室行くか？」

と声をかけてきた。

失礼な。

ころん

僕の足元に消しゴムがぶつかった。

拾い上げると、秋庭さんが手を伸ばしていた。

僕の方に顔を上げて、

「ありがとうございます」

白い頬を少し赤らめながら言った。

「はい」

と、僕は秋庭さんの手に消しゴムを渡した。

一瞬、指先が触れる。

おお。

なんか幸せだ。

#### 第四話：きつかけとクイーン

なんで秋庭さんといると嬉しいんだろう。

どうして秋庭さんのことを考えると楽しいんだろう。

…ああ、そうか。

僕は唐突に納得する。

『恋』ってやつだ。

「って、えええッ!？」

「うわっビビった。いきなり大声出すなよな」

トランプ中にいきなり大声を出した僕に驚いた坂下にこずかれる。  
いやいやいや。

違う違う。

そうじゃなくて…

…なんだ？

僕は秋庭さんについて何も知らなさすぎる。もっとも、今までもく  
に話した事すら無かったのだけど。何とか一回、話してみよう…

「おーい、早くトランプ出せ」

「ハイハイ」

「何だその気の無い返事は！トランプは真剣勝負なんだぞ！殺らな  
きゃ殺られるんだ!!」

「トランプで死んでたまるか!」

「まあまあ、じゃあ暇つぶしにトランプ二枚の合同を証明してみな  
い?」

大河内の意見に、

『それは絶対にやらん』

珍しく僕と坂下の声が八毛った。

\*

次の休み時間。

秋庭さん達の話声が聞こえてきた。「何かCDとか買った？」

「ずっと前ですけど…」

と、秋庭さん。

「へえ、何買ったの？好きな歌手とかいる？」

これは遙。

「えーとクイーンのアльバムを…好きな歌手はクイーンですね。あと、カーペンターズとか」

むむっメモメモ。

しかし渋いな、秋庭さん。

僕は行動に出ることにした。

昨日持って帰ってしまった遙の教科書を手に持つ。

名付けて、『教科書返すフリして、話のきっかけ作戦』

まったく、我ながら姑息な手段。

「遙」

僕は遙を呼ぶ。

「教科書」

僕は遙に教科書を返した。

「ああっ！無いと思ったらやっぱりアンタだったのねー！」

「授業終わったらすぐ返しなさいよ、まったく！」

悪いな、遙…。

今はお前と話している暇はない…。

「あつ、上城君は歌手、誰が好きですか？」

キタ ……！！！！

やった　　！！！！

僕は努めて平静に答える。「あんま好きな歌手とかいないけど…強いていえばクイーン」

遙がはあ？という顔をしたのは無視。

「クイーン良いですよ！曲は何が好きですか？」

よしっ！秋庭さんがのってきた。

えーと、クイーンの曲は…

「えーと、I was born to love you とか」

「良い曲ですよ」

秋庭さんが微笑む。

100万ドルの笑顔！

と、幸せもつかの間、誰かにガシッと首を掴まれた。

「上城くうくん、ちよつと良いかしらあ？」

坂下だ。

「だからやめろってその裏」

ぐふっ

工を言う前に坂下にヘッドロックをかけられ、教室の隅に引きずられる。

く…苦しい。

「さあて、上城蓮。女子達と何を話していたのかなあ？」

「まったくだよ。フェルマーの定理はワイルズが証明出来たけれど、君が女子と話すことについては証明出来そうにないね。」

「ゲホッ。好きな歌手の話とか」

「ナニイ！俺たちも呼べよ！！」

坂下がもう一度ヘッドロックをかける。

「ぬけがけか？抜け駆けなのか？彼女いない歴16年の俺たちをさしおいてそんなことをする奴だったのかお前は　　！」知るかそんな事　　！

しかし、首を絞められているので、声が出ない。

「まあ、僕は彼女いない歴5カ月だけどね」

大河内がゆづゆつと答える。

大河内は実は結構モテる。

口を開いて数学の話をしなければ。

「男の敵　！！！」

坂下が騒ぐ。

結局、僕は坂下達を連れて秋庭さん達の所へ戻る羽目になってしまった。

でも、もう一度話せるからいいか…

「どーもー！坂下でーす！！！」

「大河内でーす」

漫才コンビかお前らは！！

秋庭さん達、ちよつと引いてるぞ。

「コラ、お前もやれ」

「はいっ！？何で！」

「いいからやれ！俺たちだけやったらバカみたいだろ！」

充分お前はバカだよ！

ええい、もうヤケだ！

「…上城でーす」

坂下、大河内、遙、それにそこにいた女子達に爆笑された。

「うわっ、こいつマジでやっちゃったよ！うわっ、うわっ！！！」

「うるせー！」

見れば秋庭さんも笑っている。

それを見ると、ま、いいか…と思った。

ホントに秋庭さんは不思議な人だ。

## 第五話：期末テストと目標

あれから、数日。

僕達は坂下や大河内も交えて、前よりずっと秋庭さんに近づいた。時々、皆で話をするようになった。

そして、

本当にごくまれにだけ、

二人で。

『告白』。

それは最近、秋庭さんに対しての気持ちを理解し始めてから、少しずつ、確実に僕の頭をよぎるようになった。

まだ、僕にそんな勇氣は無いのに

\*

「はぁー…っ！ついに来た…！」

坂下が大袈裟に溜め息をつく。

坂下はいつも異常なくらいテンションが高いから、滅多に溜め息なんかつかない。

となると、こうなる理由は、ただ一つ。

「期一末テストウ」

坂下が自分で答えを言っつて、また溜め息。

「どうした、坂下っ！元気ない？」

大河内が坂下に声をかける。

「敵っ！大河内、お前は敵だあああ！！毎回テストの点が良いからつてえーっ！！」

坂下が大河内をきつ、と睨んだ後、おいおい泣き声をあげる。  
「やっぱりテンション高いかな？」

「いやあ、数学ぐらいだよ。ハハハハ」

「バカーツ裏切り者おー！うらやましいぞーっ！！」

ちなみに大河内は大の数学オタクだもんで、テストで問題を解けるのが楽しみで仕方が無いらしい。

「ただ、大河内は数学だけじゃない。

『必殺委員長』の異名をとるだけあって、毎回トップテン入り。しかも、三本の指に入る。

もちろん、数学はほぼ満点しかとっていない。

「僕には一生かかってもそんな日は来ないと思うぞ。」

「…坂下、やるか」

「おうっ！」

「うわっ！お前ら何すんだっ！あいたたたたっ！！」

僕は坂下と共に大河内を攻撃した。

「くそーうらやましいぞー」

「カンペぷりーず！」

「わたたた、やめろつてのっ！！」

「蓮、俺達は共に歩いてゆこうぜ…？馬鹿の道をつ！」

おお、と坂下に同意しかけて、ふと思った。

秋庭さんは、頭良いよな、と。

やっぱり、頭悪い男は嫌だろうな、と。

そして、

僕は坂下に返事をせずに、攻撃の手を止めて、スッと立ち上がった。

「蓮？」

「いや、坂下。僕はベスト30入りを目指す」

僕は、きつぱりと、  
宣言した。

『え、え、え、ええええええ！?』  
坂下と大河内がダブルで絶叫する。

「大河内っ！上城はどうしちゃったのっ!?!」  
「わからんっ、わからんよ坂下っ！フェルマーの定理を解く、数学者の気分だっ!?!」 「悪かったね」

これから、二週間。

いつもよりもっと、勉強してみよう。

そして、

ベスト30に入ったら。

秋庭さんに告白してみよう。

## 第六話：日常と協力

さて、どうしたものか…

うっかり、30番内入りをする、等という宣言をしてしまった。

「はあ…」

僕は深く溜め息を吐く。

これで、告白とか考えてんだから傑作だな…

そして、もう一つ溜め息。

「運つ！いまからでも遅くはないぞ？俺は馬鹿の道にお前を受け入れよう」

坂下が誘惑してくる。

30、番内か…

大河内や秋庭さんなら簡単にランクイン出来るのだろう。

それでも、

僕には

高い壁。

「でも、今まで勉強してこなかった訳じゃないだろ？」  
と、大河内。

「じゃないと、この学校にもいないしなー」

坂下も続ける。

そう。

実は僕のいる学校は公立のちょっとした進学校。

大河内程の実力を持った生徒が入るのも当然と言えた。

それじゃあ、僕と坂下は。

「いやーあんときはマジで勉強で死にそうになった」

「勉強で死ぬなら完全犯罪だな」

大河内と同じ学校に入るために。

本当に死にもものぐるいで勉強した。

だって僕は…

「あ…確かにそんなこともあったな」

「だろっ？だから大丈夫だっ」

「それにしても」

「何でいきなり30番内なんて言い出したんだ？」  
うっ

坂下の最もな質問に、僕はどきりとする。

「えーと、それは…」

言えない、言えない。『秋庭さんに僕を認めてもらって、あわよくばその後告白するためです！』

なんて、口が裂けても言えない。というより、言ったら口を裂かれるだろうな。

「じつ、人類の成長と発展を切に願い、その為にこの上城蓮、自身を高める覚悟であります」

何言ってるんだ自分！

「このウソつきめー！狼少年か、お前はっ」  
すかさず坂下のツツコミが入る。

「嘘確率、100%だね」

「まあ、いいか」

大河内が目を細める。

「協力してやるから、頑張れよっ」

げしっ、と僕の背中を思いきり蹴飛ばした。

この時、僕はまだどうして大河内が協力してくれたのかわからなかった。

いや、僕はあいつに言われるまで、全然気付かなかつたんだ。

でも、僕がそれを知った時は、もう全てが遅かった。

僕は、それをまだ知らない。

## 第七話：からっぽの少年とその心

「まずは勉強法だな」

大河内が仕切る。

「坂下は何かある？」

「ベンキョウウって何？ドラクエの呪文？」

坂下は完璧な現実逃避体制に入っていた。

「おーい、坂下ー脳味噌入ってる？」

尚も諦めない大河内に、

「かに味噌入ってます」

だめだ：

「しょうがないな、僕のも教えるけど…んーと、よし」

「秋庭さんにでも訊いてみようか」

何イツ！？

いや、嬉しいけど、

「秋庭さんは頭良いし、適役だよ」

「いや、そのほら、でも」

「おーい秋庭さーん」

「大河内いいい」

「はい？」

透明な声が帰ってくる。

秋庭さんの声だ。

「勉強法とか知らない？」

大河内がさくつと話を進める。

「勉強法ですか…」

「とにかく、ノートに書くとか、あと、クラシック等を聞きながらやるのも良いかもしれません」

「クラシック？」

これは初耳だ。

思わず、僕からも声が出る。

「あ、はい。周りの音が気にならなくて良いですよ」

「へえ…やってみるよ」

家でクラシックのCDを見た記憶は無かったけれど。

「良かったらお貸ししましょうか？」

それに気付いているのか、いないのか、秋庭さんがいった。

ん？んん？

ええっ

「良いの!？」

「はい。たくさんありますので」

「じゃあ、借りようかな…」

「わかりました。明日持って来ますね」

やった!

これはすごいぞ。

大進展だ。

まあ、全ては二週間後のテストにかかっている訳だが。

「良かったな」

大河内が言った。

「ん。サンキュ」

まさか大河内に気づかれたか…?

いやいや、まさか、ね。

「入試の時みたくやれば楽勝だよ。中学の先生、ビックリしてただる？」

「そんなこともあったな…」

坂下と先生にこの学校を受ける、と言った時。

飲んでいたコーヒーを吹き出された。  
受かったと言ったらもつと仰天された。

でも、絶対に入る理由があったから。中一の四月。  
僕らは確かにそれを手に入れた。  
だから、絶対に手放す訳にはいかなかったのだ。

\*

からっぽの少年と、  
数学を何より愛する少年と、  
努めて明るく振る舞おうとした少年がいました。  
彼等は皆、一つ大事な物が欠けていました。

からっぽの少年はそれが何かわかりませんでした。

数学の少年はわかっていたのに、数学以上のものを手に入れること  
ができませんでした。

明るい子であろうとした少年は、ぼんやりと気付いてはいたものの、  
かりそめのものしか作れませんでした。

そして彼等は、出会ったのです。

そして、気付きました。

ああ、これが …

少年達はずいに欠けていたものを手に入れることが出来たのです。  
それは …

\*

さあ、勉強…

耳につけたCDプレーヤーから心地良い音楽が流れ込む。

秋庭さんに借りたクラシックのCDだ。

確かにテレビの音等がまったく気にならないし、良いかもしれない。

何より、秋庭さんのCDだし。

それに、シヨパンが気に入った。

僕に欠けていたものを手に入れた中一。

そして、今が高一。

秋庭さんは、

もしかしたら初恋？

昔はそんなもの、全然知らなかったのに。

勉強をする手に熱がこもる

勉強をすればするほど、君に近づく気がして

中身のない心が動く

君の存在が僕の心に中身をくれる

もしかしてそれは、

僕に芽生えた恋心？

## 第八話：シヨパンのピアノと理解不能

シヨパンの曲に合わせて、シャーペンを動かす。  
ついに明日が、決戦の日

\*

「オッハー」

坂下に少し古めの挨拶を投げられ、テスト一日目が幕を開けた。  
坂下はなんだか嬉しそうだ。

テストなのに？

「なんか嬉しそうだな」

「あ、わかる？昨日ドラクエクリアしちゃってさ！」

…勉強しろよ！

「…テスト今日だぞ？」

「ドラクエの方が大事だ」

きっぱり。

頭に激痛が…

「…留年したりして…」 「大丈夫、大丈夫。金を積みばなんとかするさ」

「裏口かよ！！」

うっかり本気でつつこんでしまった。

「冗談だってーそんな金あるわけないだろー？」

「お前ならホントにやりそうで…」

いかん、いかん。

テストが始まる前に暗記でもするか。

ガラッ

ノートを取り出したところでドアが開いた。

「テストが始まりますので席に着いて下さいねー」  
理科担当・翠川の間伸びした声が教室内に響く。

「教科書やノートは見ちゃダメですよーもつともこれから一ヶ月程、覗き魔や、カンニング魔という愛称になりたかったら別ですけどねー」

覗き魔にカンニング魔：赤点取るより嫌かもしれない。

くそう、坂下！お前と話してたせいでぞ！！

仕方なくノートをしまい、坂下を軽く睨んだら、

満面の笑顔とピースで返された。

おのれ、企んだな。

\*

おおっ！

テストが普段より簡単なもののように感じた。ショパンの曲に乗って、シャーペンから答えがほとばしる。

曲は今、ポロネーズ

「軍隊」

から

「華麗なる大円舞曲」

へ。

ふと、前の席の秋庭さんの事を思った。

彼女もテストを解きながら、このピアノの音を聴いているのだろうか

もしそうなのだとしたら

それはとても素敵な、音色だな

僕らの耳にだけ響く、ピアノの音色

やがて最後の問題に辿りついた。

ピアノは、終曲、

「別れの曲」へ……………

\*

「終わった〜！」

大きく伸びをして、深呼吸。

こうして、僕の勇気を賭けた、一週間のテストが終わった。

「今回の数学はものたりなかったなあ」

大河内がぼやく。

「嫌味だぞー」

「ふふん」

「ムッ」

このふんだと、大河内はおそらく本当にものたりなかったのだろう。

僕には充分過ぎるほどのものたりたぞ。

「坂下は？」

大河内が僕の反撃を受ける前に、話を反らした。

坂下は机につつぶしたまま、動かない。

「おーい？」

「追試では満点を狙います」

最初から追試ねらいか！！

でも、とりあえず、テストは終わったわけだ。

そして、結果が出て、  
30位以内なら…

秋庭さんに…

「蓮ー！どうだった？」

遙の声だ。

「…三話ぶりの登場？」

「は？何それ」

「いやいや、こつちの話」

「それよりテストどうだった？」

「まあまあ…かな」

実はちよつと自信あり。

初めての経験だ。

「ええっ!？」

遙が驚く。

「何でそんなに驚くんだよ」

失礼だぞ。

「いや…だつて、長年幼馴染みやつてるけど、いつつもだめだーつてこつ、くたくたになつてるじゃん」

「そうだっけ？」

「そうよ！小学校からずーつとそうだつたんだから!！」

「よく覚えてるなあ…他人のことなのに」

「えっ」

何故か遙は慌てた。

「いや、だつて、その、ねっ？」

耳まで真っ赤になっている。

夕陽のせいだな。

「顔真っ赤ー」

すると、遙はますます真っ赤になって、

「ばかつ!!」

僕の脛を蹴っ飛ばしてきた。

「痛てっ!!おのれ、べ、弁慶の泣き所を…」

「うるさいばーかつ!!」

そんなに気にさわる事、言っただけ?

まったく、女子の気持ちは理解不能だ。

第九話：告白と掃除当番SIDE・B 〱 四月の雪

ついにテストの結果が発表された。

廊下に貼られたそれを、緊張の面持ちで眺める。

テストの結果を見ることにこれほど緊張した事は無い。

上から順に名前を探す。

大河内はいつも通り、学年トップ。

秋庭さんは八番。

遙は十七番だった。

そして僕は

三十番：上城 蓮

「！」

一瞬遅れた後、其れが自分の名だと気づく。

目を見開いて、もう一度確認する。

何度も、何度も。

やがて、その名が消えない事を確かめると、

やった!!!

僕は誰にともなく、その場で小さくガッツポーズをした。

\*

秋庭さんに、告、白…

その為に自分は頑張って勉強したのではなかったか。

それが、今。

目標が達成したにも関わらず、まだ迷っている自分が居るのだ。

「蓮!」

坂下と大河内がやって来て、僕の背中を思いきりひっぱたく。

「いてっ!!!」

「ホントに三十番とりやがってー」「まったくだよ。君の平均点数と勉強量等から確率を計算したんだけど、全然三十番以内にいけないになかったのねー」

それは褒めてるのかけなしているのか？

「褒めてるに決まってるだろ」

大河内が言う。

「でも、なんでそんなに頑張ったんだよ？俺なんか百八十番だぜ」

… ちょっと待て！

一学年二百人だぞ！！

「それはすさまじいな…」

僕の呟きに、

「それより後ろに二十人もいたことの方が不思議だけだね」

「ひでー」

「きつと上城は目標の決め方が良かったんだよ。」何か賭けた…  
とか」

どきり。まさかな…

「何賭けたんだよ？」

「何も賭けてないよ」

白々しい嘘。

「怪しいな」

「ホントに何も無いっ」

三人で笑いながら、僕は意思を固めた

一回位、何かを試してみてもいいかもしれない

それに、結果がどうあれ、

僕にはこの二人がいるのだ

只その場につつまって、君を見つめるだけより、

全身全霊で、当たって砕ける

想いは口に出さなければ伝わることはない。

そして僕は、決意する。

秋庭さんに、告白しよう

\*

「…僕と…ッ付き合って下さいっ」

「は？」

「え」

「すみません、掃除当番なので後で良いですか？」

「ハイ…」

「それでは」

緊張して、緊張して、少し早口で言ってしまった初めての告白。

それでも、僕の告白は彼女にとって掃除当番にも満たなかったらしい

秋庭さんはそのまま、小走りに走り去って行ってしまった。

元々失うものなんて、何もない。

とか思っていたけれど、これは結構へコむかもしれない。

それでも僕は、走り去る彼女の背中をじっと見つめていた。

その姿が完全に、僕の目の前からかき消えてしまうまで  
ずっと…

僕はこんなに秋庭さんが好きだったのか…

「あーあ、カッコ悪いなあ…」

僕の前を雪が通り過ぎる。

## 四月の北海道

世間はもう春だといつのに、

まだひっそりと、雪が降る。

白く、白く

僕の周りを雪が覆う

降り積もる雪は、どうせ何時か

溶けて消えてしまうのに

まるで、最初からそんなものは存在していないとでも、いつか

それでも雪は舞い降りる

懸命に、何かを繋ぎ止めるように

何かを伝えるかのように

空から舞い降り、地面に当たって

砕けて消える。

僕の想いも雪の様に

降り積もって、

秋庭さんに当たって

砕けて消えてしまったのだろうか

いつか春がやって来て、

全て溶けて消えてしまうのだろうか

それはまだ、わからない。

けれど、僕にとって、彼女は春だから

そして、僕は雪じゃない

僕の想いが消えないように…

この雪に、僕は祈る。

この春最後の、雪だった。

間章：秋庭紅葉と佐々千歳（前書き）

秋庭さん視点です。

## 間章：秋庭紅葉と佐々千歳

はあはあはあ…

自分でも珍しいと思うほど、とにかく走っていた。

上城君から告白された…。

とても驚いて、その場を逃げてきてしまった。

「千歳<sup>ちとせ</sup>、ちゃん…」

肩で息をしながら友達の名前を呼ぶ。

「クレハ？珍しい〜走ってきたの？」

千歳ちゃんは、私が唯一クラスで敬語を使わずに、普通に話せる人。そんな千歳ちゃんは私の事を「紅葉」を音読みして、「クレハ」と呼ぶ。

このあだ名を、私は気に入っていた。

大抵の人は、「秋庭」ときいて、「秋葉原」を連想するから。

「うん、走ってきた…」

「大丈夫？顔真っ赤ー」

千歳ちゃんが私の顔を覗きこむ。「え」

初めて顔が真っ赤だった事に気付いた。

確かに頬が熱い。

「は、走ってきたからだよ」

おそらくこれは言い訳。

走ってきたからじゃなくて、多分

「何かあったの？」

「へ？」

千歳ちゃんに言い訳は通じない。

何故か千歳ちゃんには私の思っていることがわかってしまうのだ。でも、不思議と全然不快じゃない。

「ほーら、ほら。お姉さんに言っでごらんさーい」  
「うう…」

言っでいいのかな。

「さあ、さあ」

「じ、実は…」

千歳ちゃんに全部話した。

なんだか、一人で迷うより、ずっと良い気がしたから。

「ええええっ!?!」

千歳ちゃんがすつとんきような声を上げる。

「声大きいよ」「ゴメンゴメン。しっかし上城もやるねえ…」

「それで…凄くびっくりして…」

告白なんてされた事がなかった。

というより…

自分が人に好いてもらえる人間にはどうしても思えなかった。

「それで?びっくりしてどうしたの?」

千歳ちゃんの問いに、

「そ、掃除当番だから後で、って…」

「ええええっ!?!」

千歳ちゃんは再び叫んだ。

「なにそれ?!?私なんか一回も告白された事ないのにー!」

「うう…ホントにびっくりして…」

後で上城君に謝ろう…

窓の外を見ると、雪が降っていた。

これがなごり雪ってやつかな?

この雪みたいに純粹で、素直な人間になれたらいいのに。

誰かに、好かれる人間になれたらいいのに。

憧れは、願いのまま、成就することはない。

願いを叶えるには、憧れを目標に昇華させなければならぬ。

誰かを好きになりたい

好きになってもらいたい

こればかりは、憧れのまま、目標になんてなりそうもない。

…上城君は、私の事を好きになってくれているのかな？

「クレハ」

千歳ちゃんに呼びとめられた。

「なんかまた、勘違いしてるみたいだから言っとくけどさ」

「私にあんたのこと大好きだよ」

「」

思わず、頬が緩んだ。

同時に、何だか泣きそうになった。

千歳ちゃんには、なんでこんなに私の気持ちかわかるんだろう。

「多分上城もね」

うん、と言おうとしたけれど、頷く事しか出来なかった。

只、嬉しかった。

上城君に謝ってしまひ…。

## 第十話：フラれ雪と想い雪

先ほどから何度も溜め息を吐きながら、黙々と絵を描いていた。実は僕は美術部。

秋庭さんに見事にフラれてから、美術室に駆け込んで、ずっと描いている。

それというのも、絵を描いていると気が紛れるから。そして、

今日の事を忘れない為でもある。

失恋の記憶を残して何になる、とも思っけれど、忘れたくはなかった。

描いているのは、雪。

これがホントのなごり雪かな、と思いつつ、

題名・フラれ雪。

いかん、自虐的になってきた。

「上城君！」

え？

この声は…

「秋庭さん！？」

何で秋庭さんがここに？

「良かった…もう帰ったかと…」

秋庭さんはほっと、安堵の溜め息を吐いた。

なんだなんだ？

状況が全然掴めない。

「先ほどは、ごめんなさい」

「えっそんな…」

謝られたら、もっと辛い…かもしれない。

「とても驚いてしまって、ついあんな事を…」

「え？じゃあ…」

「はい。上城君が嫌い、などでは決してありません」

決して、の所を強調して言った。

それが、何だか嬉しい。

「いや、僕の方こそ、驚かせてしまって…全然気にしていないし…」

「本当ですか？」

確かに、少しはへこんだけれど、秋庭さんを嫌いになんて、なる訳がない。

「はい」

いつの間にか、僕まで敬語になっている。

「良かった…」

秋庭さんは二度、安堵の溜め息を洩らした。

静かな沈黙が、部屋を満たす。

と、

「とても綺麗な絵ですね」

秋庭さんが、僕のフラれ雪に対して、そう言ってくれた。

「いや、そんな大した物じゃ…」

いいえ、と秋庭さんは首を振って、

「お世辞等ではありません。ホントに綺麗です」

例えお世辞でも、嬉しさに心臓が早鐘のように打っている。このま

まだと、宇宙まで飛んでいきそうだ。

「そういえば、この間も、どこかの賞をもらっていましたよね。」  
覚えていてくれたんだ…

こんなに、幸せでいいんだろうか。嬉しすぎて、不安になって来た。

「この絵の題名は？」

「フラレ雪、と言う訳にもいかず、

「まだ決まってません」

と、答えた。

「そうなんですか。…そうですね…」

秋庭さんは暫し、考えた後、

『思い雪』

「何だか、そんな感じです」

思い雪…ピッタリの題名だ。

「とても良い題名です…詩人なんですね」

「え、いえつ。ですが…」

恥ずかしそうにうつ向いた後、

「将来、作家になりたいです」

と、言った。

「へえ…秋庭さん本好きだし…ピッタリだ」

秋庭さんははにかんだ微笑みを僕に向けた。

「それじゃあ、僕が絵で、秋庭さんがストーリーを考えて…」

画材道具を片付けながら、言ってみる。

「二人で漫画を描いたら、上手くいくかも」

心から、何だかそう思った。

「それは良い考えですね」

秋庭さんは微笑った。

ああ…この笑顔に弱いんだよな。

穹から降り続ける想い雪は

まるで幸せを引き連れてくるようで

僕の心に一時の幸福が

雪のように、

ゆっくり、ゆっくり

積もっていった…。

**間章：小野寺遙と噂委員会（前書き）**

遙視点です。

## 間章：小野寺遙と噂委員会

噂委員会

女子の中でも知る人ぞ知る、秘密裏の裏委員会。

そして、あたしはその書記係。

と言っても、元々噂なんてものはほとんど信じちゃいないし、書記をやっているのも、友達に誘われたのと、

「情報が集まりやすい」から。

でも、その噂委員会からとんでもない情報が舞い込んで来るとはあたしは夢にも思わなかった …。

\*

「それでは、噂委員会、はーじめー！」

委員長・菜緒の合図で、噂委員会開始。

場所は体育館裏。

カツアゲじゃないけど。

「それでは、隠密情報科より噂の発表！」

隠密情報科？

忍者かつ！

「えーとですねーまず、最新のものから、」

『上城蓮が秋庭紅葉に告白した』

「は？」

おもわず声が出た。

飲み物があったら、ウルトラ水流の如く吹き出していただろう。

「小野寺さん、どうかしましたか？」

「あ…いえ…」

ウソだ。

蓮が秋庭紅葉に告白したなんて。

\*

雪が降ってるせいで空がどんよりと、暗い。

春の北海道は全然綺麗じゃなくて、雪融け水で路面がぐちゃぐちゃになるおかげで、むしろ汚い、という印象を感じさせる。

蓮が、告白、か…

所詮は只の噂、という考えも出来る。

でも、どうしても気になって仕方がない。

そもそも

「あの上城蓮が」

恋なんてする筈がないんだ。

できる筈が、無い。

でも、坂下や大河内のときのようないきなりあるのかもしれない。

感情を取り戻す…

二人に会ってから、蓮は前よりもすっかりいろんな感情を取り戻して、普通となんら変わりなく見える。

でも、やっぱりからっぽなんだ。

あの日、雨と一緒に彼奴の中身は溢れ落ちてしまった。

あたしじゃ、ダメなのかな？

あたしは、誰よりも長く蓮の側に居て。

でも、結局時間なんて関係ないんだよね。

大事なものは、心の側に居るかってこと…。

会ったばかりで、たちまち心の側に寄ってしまった、坂下と大河内。

そして、秋庭紅葉。

あたしは蓮本人の側に居るのに。

心の側には、行けないのかな…？

\*

「それでは特殊広報科から、ばら蒔いた噂の反応をー」  
もう、噂委員会の役職名について突っ込む気にもなれない。

「学校中にばら蒔いた噂の反応はですねー…」

特殊広報科は、集めた噂を学校中にばら蒔いて、そこからつく尾ひれのバリエーションを調査する。

蓮の告白の噂にも尾ひれが見ついたが、

体育・マツチヨ教師（ ）に熱烈な愛の告白をしたとか、

飼育小屋の兎との、種族を越えた恋だとか、

くだらないものばかりだった。

やはり、秋庭説が一番強い。

幼馴染みという所から、あたしに告白したという説もあったけれど、只の噂だということは、自分がよく知っている。

もしそうだったら、どんなに …

思えば、私が持つてるスペックなんてものは、

『幼馴染みである』

という事位しか無い。

彼奴が秋庭紅葉に恋をしたのなら、

あたしにだって出来るはず。

絶対、振り向かせてみせる。

心の側に、寄ってやる。

これでも、片想い歴、七年だよ…？

何時になったら、気付くの、

あの鈍感は。

## 第十一話：エア・ウォークと壊顔

1時間目から、体育。

さすがに眠ってしまふことはないけれど、かなりだるい。

その上、担当の先生が熱血マツチヨ・光田なのだから疲労度倍増。暑苦しいことこの上ない。

そして体育は坂下の独壇場。

悪く言えば、体育“だけ”だけ。

「うおっし跳び箱七段いつちやるぜ！」

はしゃぐ坂下に、

「朝から元気だな……」

僕は欠伸をひとつ。

「七段跳べるの？そりや凄いね」言いつつ、大河内は跳び箱の段数を足したり割ったりして10になるような計算を作っている。

「案ずるな、北小のマイケル・ジョーダンと呼ばれた男だ」

「マイケル・ジョーダンってバスケの選手じゃん……」

せめてモンスターボックスの池谷とか。

段数が35段位違うけど。

だいたい、小学校の話って何年前だ。

「だからエア・ウォークで跳ぶんだよ」

「跳び箱を？」

エア・ウォークで？

「うむ」

「おいおい、そりやちょっと……」

無理だろ。

絶対無理。

「俺の勇士をしかと目に焼き付けろ！」

「あ」

坂下は一目散に跳び箱に駆け寄り、跳び箱にぶつかる盛大な衝撃音

を体育館に響かせた。

\*

「まったく、馬鹿だわ」

遙が一蹴する。

あれから、坂下は足の小指が痛い、痛いと言わして、とりあえず湿布を貼ることにした。「だいたいなんで私がやらなくちゃならないのよ」

遙は愚痴を溢す。

「そりゃ小野寺が保健委員だから」

坂下のもつともな反論に、

「わかってるわよ！うわ、なんか足臭そう」

「失礼な！フルーティな香りがするんだぞ」

「嘘つけ！」

……なんか足からそんな臭いがしたら逆に嫌だ…

まあ、でもこの二人、見てて飽きないな…

お似合い、ってやつかな？

「何ニヤニヤしてんのよ」

遙が睨む。

「ん？僕？」

「そうよ」

「いやいや、お似合いだと思ってさ」

『そんなことない』

遙はムキになって、

坂下は照れくさそうに笑って言った。

「無理！そんなこと絶対無い！」

きつく否定する遙に、坂下はシヨックを受けたような顔をしていた。

「そんなに否定しなくとも…」

坂下が哀れになってきた。

そう僕が言つと、遙はますます不機嫌になって、

「蓮なんか光田とくつついちゃえ！」

「はあ!？」

光田つて男じゃん!

しかもマツチヨじゃん!!

いきなり何を言い出すんだ、こいつは。

僕は今のところ秋庭さん一筋だし。

そつえば、僕はフラれたんだっけ?

嫌いつてことはないつて…

要するに、『振りだしに戻る』、か。

\*

何時から秋庭さんが僕の視界に入って来たんだっけ…

最初は、

「秋庭」

と聞いて、

秋庭 アキバ 秋葉原?

なんて思ったものだけど。

教室がやけに騒がしい。廊下まで声が響いている。

何だ、何だ?

教室に入ると、笑い声はその場を占領していた。

しかし、それはさながら

嘲るような、見下すような、

そんな嫌な……嗤い声。

「秋庭つてアキバに似てるー！」

一人の女子の声に、数人がつられて笑った。

「確かに！じゃあオタク！？」

きゃはは、と甲高い笑い。

「秋庭さん本好きだしねー」

けたけたと、

その嗤いは無意識に、無自覚に、深く、他人の心をえぐっていく。

秋庭さんはその嗤いに包まれた混沌の中、

静かに微笑っていた。

只其れは、僕の知る彼女の笑顔ではなく、

『壊顔』

笑顔とは決定的に違う、全ての希望が打ち砕かれて壊死してしまっ  
たかのような、

目の前の惨劇に対する抵抗を全て諦めたかのような、

壊顔。

とても、痛々しい顔。

周りは、彼女の変化に気がつかないのだろうか？

秋庭さんが楽しくて皆と笑っているとしても、本気で思っているのだ  
ろうか？

嗤い声が、続く。

ぱりん、と、酷く小気味良い音を起てて、秋庭さんの心が割れる音を

聞いた気がした。

## 第十二話：素敵な名前と心からの笑顔

「……」

ハヤクトメナイト

ハヤクアキバサンヲタスケナイト

しかし、僕の体は金縛りにあつたように動かなかつた。

目の前に、苦しみながらも無理矢理微笑っている秋庭さんがいるのに。

「どうした……」

遅れて教室に入ってきた坂下と大河内は直ぐ様眉根を寄せた。

「……！」

坂下が体を曲げる。

坂下は人一倍こういう空気に敏感だ。

そしてそれは大河内も同じく。

それは本当に

痛い位に。

「痛……」

坂下が腹の痛みを訴えた。

坂下は直ぐに体にストレス性の症状がでてしまう。

昔の、傷痕。

対して大河内は倒れるまで我慢する。

開く、古傷。

「保険室、連れてく」

大河内が坂下を連れて廊下に出た。

「僕も…」

僕もついていこうとしたが、二人は秋庭さんを視線で指し示した。

「っ」

秋庭さん。

どうすれば、どうすれば彼女を助けられる？

その時、始業のチャイムが鳴った。

秋庭さんを取り巻く混沌は、各々の席へ飛散していく。

その場に大きな、創痕を残して。

本当は授業等、どうでも良かった。

只、彼女を助け出せなかった自分が

終礼と共に、秋庭さんは逃げるように教室を出た。

「秋庭さんっ」

僕はその背中を追い駆ける。

学校から出たところで、ようやく追い付いた。

「上城君……」

「さ、っきの」

息も絶え絶えに、意思を伝えようと口を開く。

「気にしちゃ、駄目、…」

秋庭さんは一瞬の間を置いて頷いた。

「実は、初めてじゃないんです」

ぼつりと、秋庭さんは言った。

「前にもこんなことがありました」

秋庭さんと言う。

「皆、秋庭と聞くと秋葉原を連想してしまうみたいですよ」

僕も

それが秋庭さんを傷付けているとも、知らずに。

「前はもつと酷かったです」

彼女は語る。

「敵は、先生でしたから」

先生…？

「私は当時、授業中眠くなってしまう事が度々ありまして」

「そんな私の目を覚まさせる為と称して、先生は私に秋葉原から連想した『オタク』というあだ名をつけ、それを授業の例題に当てはめていくようになりました」

本ばかり読んでいましたしね、と秋庭さんは目を伏せる。

「曰く、オタクさんの買った本xとyについての連立方程式…曰く、

『オタクは今日も本屋へ行く』の主語と述語を答えよ」

「よく考えれば、名前をからかわれただけなのですけれど」

秋庭さんは、自嘲気味にそう言う。

彼女はずっと、苦しみ続けて来たのだ。

自分の好きな秋庭紅葉と言う名では、誰も呼んでくれない失望。

高校へ上がって尚も、言われ続ける絶望。

「誰も信用出来なくなった私は、ますます本にのめりこんで行きま  
した」

秋庭さんは一旦台詞を切って、続ける。

「人間って、滑稽ですよ。人が居ないと生きていけない癖に、」

「人のせいで、生きていけなくなるなんて」

「……」

僕は黙って聞いていた。

何も、言えなかった。

が、

「僕も」

「？」

「上城を音読みしてジヨジヨ、移動する度に『ジヨジヨの奇妙な冒険』とか言われてました」

「そして、ごめんなさい」

僕は、秋庭さんに深く頭を下げた。

「！？かみしろ……」

秋庭さんは驚いたようだ。

「僕も、秋葉原を連想してしまいました」

「……いえ……」

「でも」

「よく見て、凄く綺麗な名前だと思いました」

「秋の庭の紅葉…凄く、凄く綺麗な良い名前です」

「……」

秋庭さんは暫くうつ向いていたが、やがて顔を上げ、

「…ありがとう」

今度は、心からの笑顔と共に。

### 第十三話：転校生と開幕戦の嵐

「知ってる？転校生が来るんだって」

遙が言った。相変わらず女子は情報伝達が速い。

「へー……」

「反応悪いわね。もつと何かないの？」

「んなこと言われてもなあ……」

『イケメン、秋庭さんが好き、頭良し』の三つがビンゴしてなければ特に言うことはない。

「イケメン、秋庭さんが好き、頭良しがビンゴしてなければいいねえ」

坂下と大河内が僕の耳元で声を揃えて言った。

「！お前ら何故それを！……じゃなくて何言ってるんだ！！」

「フツバレバレなんだよ隠したつもりか」

「そういうのを頭隠して恋隠さずって言うんだよな」  
微妙に違うぞ？坂下よ。

しかし、その日が嵐の幕開けになるとは、誰も予想していなかった。

\*

カツカツと先生が名前を黒板に書く。

『一崎 清吾』

「今から連れて来ますからねー……イジメンじゃねえぞ」

先生は穏和な口調を切り換えて、ドスの利いた声で言う。  
クラスはお喋りの喧騒で包まれた。

「どんな人かなあ」

「カツコイイといいなあ」

話声のほとんどは女子。

「イケメン、秋庭さんが好き、頭良しに千円」

僕らは賭けをやっていた。

「あ、俺も」

…薄情な友人関係だな。

「蓮は？」

「…不細工、秋庭さんを何とも思っていない、頭坂下と同レベルに千円」

「あゝわかりやすいなあ」

「青春ビーム炸裂？」

その時、ドアが開いた。

きゃあああ、と女子の歓声が上がる。

「とりあえずイケメン」

ボソツと坂下が呟いた。

その通り、一崎清吾はイケメンだった。

「一崎清吾です。どうぞよろしく」

赤茶色の長めの髪に、チラツと見せる白い歯。

黄色い歓声がまた一段と増した。

「そうですねー席は…秋庭さんの隣が空いていますねー」

えっ？ちよつと先生、漫画みたいな展開。

それより、秋庭さんの隣ってちよつとちよつと。

一崎は秋庭さんの隣まで歩いて行く。

「よろしく。名前は？」

「あ…秋庭紅葉です。よろしくお願いします」

「秋の庭の紅葉か…」

「とても綺麗な名前だね」

「…ありがとうございます」

秋庭さんは表情にこそ出さないが、嬉しいに違いない。

待て、待て、待て。

ポイント高いぞ今の。

僕がやっと辿りついた距離を、一崎は秋庭さんと会って30秒で到達してしまった。

これはやばい。

僕は全身全霊で感じた。

嵐の 幕開け。

## 第十四話：元ヤンと守りたい人

曇一つ無い青空。

逆に何かが起こりそうな位平和だ。

しかし、先に起こることなんか今は気にしていられない。

まずは秋庭さんのあだ名を撤回させる事。

そして、何よりも。

僕の頭の中で黄色い歓声とチラツと見せる白い歯がフラッシュバツクする。

そう！一崎清吾！！

まったく、まったく。

僕はとりあえず教室の扉を開けた。

「あ」

秋庭さんだ。今日は大吉。

「おはようございます」「おはよう」

すると、後から入って来た男子が、

「おはようオタクさん」

一瞬。僕が文句を言うより先に、そいつの体が宙を舞った。

「がはっ！？」

一拍置いて、悲鳴と机にぶつかる衝撃音が響く。

続いて、殴った者からの怒声。

「てめえ、いてこましたるかボケエ！」

え、えーと？

脅す前に、もう拳入ってるし。

恐る恐る声が飛んできた方向を見る。

そこにはメリケンサックをはめた鬼：いやいや、女子が立っている。

た。よく見ると、足元にかなりの数の犠牲者の屍が転がっている。

この人、誰だっけ？

「千歳ちゃん！」

「止めんな、クレハ！まったくあたしが休んでたのをいいことに！」  
ああ、そうだ。佐々さんだ。秋庭さんの親友の。

確かあだ名の時と、一崎の時は休んでたんだっけ。

「千歳ちゃん、ホントにもういいから…」

「あたしは許せへん！クレハをオタクとか言つた奴！覚悟しいやあ  
！！」

それにしてもこの人、さっきから方言が滅茶苦茶だな…。

最初は広島で、次は関西、ラストは岩下志麻。

あれ、岩下志麻は方言じゃないか。

「おい、上城こつちこつち」

呼ばれた方に振り向くと、坂下と大河内が机でバリケードを作っ  
ていた。

「無事か？」

「なんとか」

「大体あの裏拳秒速何メートルだろう？見えないよ」  
すると、からら、と教室の扉が鳴って、誰かが入って来た。

「おはよう秋庭さん」

キラツと白い歯が光る。

一崎だ！

「おはようございます」

「誰やこいつ」

佐々さんがうさんくさそうに、じろりと一崎を睨む。

「昨日転校してきた一崎清吾。よろしく」

「Nice to meet you too」

佐々さんの方言ミックスに英語まで入って来た。しかも発音完璧。  
一体、何者？

その時、幸運にもチャイムが鳴った。

「はい、席に着いてねー」

先生は床に転がっている犠牲者を見て、

「朝だから眠いのは、わかるけどね、床で爆睡はねー」

寝てるのではなく気絶してるんですが。

そして、机や椅子が滅茶滅茶になっているのを見て、

「学級崩壊か？ナメた真似してんじゃねーぞガキども」

ごきり、と骨を鳴らす。

「浅川ちゃん、可愛いけど元ヤンなんだよなー…」

坂下がふつと、哀愁を込めた瞳を向ける。

確かに担任の浅川雛子は元ヤンだ。

『担任の浅川雛子ですーよろしくねー』

初登場の浅川先生は、何処か真延びした口調と、少しパーマのかったセミロングの髪。その上、眼鏡を掛けた優しそうな風貌の相乗効果で、

「優しそうな教師だ」

と、皆を安心させたのもつかの間、

「世間つてのは縦社会！よって、教師と生徒は親分子分。親分の命令には絶対服従！それがこのクラスのルールだ」

眼鏡の奥でギラギラと双眸が鋭い眼光を放つ。

先生はにっこりと最初の笑顔に戻ると、

「これから一年間、夜露死苦ねー」

夜露死苦って…。

かくして、僕らのクラスは『浅川組』と呼ばれる事となった。

もちろん、クラスという意味の組ではなく、『族』という意味で。

かくして、気絶していた奴らは飛び起き、佐々さんの事件は不問となった。

ただ…

「上城、ちよつと来て」

放課後、僕は佐々さんに呼び出しをくらった。

「あんた、クレハのこと好きなんやろ？」

いきなり。

僕は一瞬言葉に詰まる。

「どうなん？」

「僕は…」

そんなの、決まってるさ

「僕は秋庭さんが」

「ストップ！」

覚悟を決めて言おうとしたのに、何なんだこの人は。

「やっぱそれはクレハに言って」

「はー、安心したわ。クレハはあの通りめんこい子だし、私がいな  
いときはあんたがクレハを守って。」

佐々さんは、

「めんこいって可愛いってことね」

と、付け足す。そんな事よりも。

「僕が…」

僕はあの時守れなかったというのに。

「私さ、転勤族なんだよ」

「あ、それで…」

言葉。

「ん。感情が高ぶったら、方言ミックスしちゃうし」

「もう高校になっただけど、これから転校しないともしない切れない。

私はクレハを守れないかもしれない」

「だからさー…」

安易な約束は出来ない。

僕に出来る事なんて、たかが知れてる。

また、秋庭さんを守れないかもしれない。

でも、

「秋庭さんを守りたい」

佐々さんは、ニカッと笑った。

## 第十五話：桜と乙女な人々

桜が道路に散る。

北海道は五月がちょうど満開なのだ。

桜は散るために咲く、なんて言うけれど。

「おはよ

遙の声で、僕は桜から目を離す。

「ういっす

「桜満開だねー」

「んー」

遙は微かに目を細めて、

「桜って、恋に似てるかも」

遙は、はっとした様に顔を赤らめると、

「うわっ何言ってるんだろ、私。はずかしー!」

でも、確かにそれは当たっているかもしれない。

「例えば？」

「えっ何？さっきの？」

「ん

ええーと唸りながら、

「例えば…恋の始めが蕾なら、恋している時が、満開で

確かに、言িয়েて妙だ。

「それで…」

遙は言いにくそうに、声を萎める。

「散る時が…失恋？」

「うわあ…言িয়েて妙。」

そういえば、秋庭さんの告白の返事どうなったんだろう。でも、訊いたらしつこい奴って思われるか？

まだ桜は散ってほしくないんだけれど。

「でも、散るために咲くって言うじゃん」

悔しいので、少し反論してみた。

「まあ、失恋するために恋はしないわよね」

「んじゃ、そこだけハズレか」

「んー、そこは多分逆なんじゃない？」

逆？

「失恋するために恋をするわけじゃない様に、桜も散るために咲くものじゃないんじゃないか、ってこと」

「成程」

「どっちかって言うと、咲くために散るのかもね」

「咲くために？」

「だってさ、散った姿を見たからこそ、咲いている時が美しいと思うじゃない」

「…だから、泣いている時を知っているこそ、笑っているのが嬉しいのかな」

「……」

そして、それは確かに言いえて妙なのだ。

「…でも」

「何よ？」

「遙って恋してんの？」

沈黙。

あれ？遙が鬼に見える。

「バカーッ！」

辞書の入った重い鞆が、遠心力込みで、脇腹に決まった。

「くっ！暴力女」

「うるさい！」

今度は頭に。

まあ、考えてみれば、遙とは一番古い付き合いなんだよな。

僕はぽつりと呟く。

「桜を一番一緒に見たのは遙か…」

「え」

遙はみるみる笑顔になった。

「そりゃ、幼馴染みだしね」

「ねえ、今度桜の絵描いてよ」

「あー、良いかも」

桜の絵か。悪くないな。

「散ってるのと咲いてるの、どっちがいい？」

「それはもちろん」

「満開で」

遙は笑った。桜の様に。

花は咲くとき、『笑う』とも言っらしい。

『桜は散るために咲く』

それはきつと間違いで、咲くために散るのだと遙は言う。

人と桜は、本当にそっくりで、

舞い散る桜の綺麗な様に、泣いている人間もまた、綺麗なのかも  
しれない。

だが、涙を振り払う様に、散った桜は咲くのだ。

満開に、桜は笑う。

そしてそれは、人もまた …

「……」

「何？」

「いや、遙って以外と乙女チックなことを……」

「以外は余計よ！真剣に聞いてた蓮だって乙女じゃない！」  
「げげっ」

薄桃色の桜の花びらが一片、僕らの上に降り注ぐ。

第十五話：桜と乙女な人々（後書き）

こんにちは。天海沙月です。ここまで読んでくださってどうもありがとうございます。

まだ学生なもので、テストと英検が迫ってきました。六月中旬まで更新が滞るかもしれません。御迷惑をおかけします。 m ( | | )

m

## 第十六話：恐怖の六月とあの人は誰か

結局、遙と見たあの桜は、先日の雨で皆散ってしまった。

なんだか名残惜しいような気もするが、また来年、何事もなかったように、桜は笑うのだろう。

そうして、桜の代わりに紫陽花が色付く。

そんな、六月の始まり。

\*

…なにが六月の始まりだ。

始まるな六月。

六月は学生にとって恐ろしい月である。

思えば伏線はあちこちにはりめぐらされていたのだ。

すっかり忘れてた僕も悪いけどさ。『ここ中間の範囲だぞ』

『テストに出ますよー！』っかり覚えてねー』

テストなんてまだ先だろう…。

五月が終わる。

え？六月？

『中間テスト』

「いや　！？」

坂下の絶叫。ありがとう坂下。お前がやらなきゃ、僕が叫んでた。思えば、前回のテストで30位以内なら秋庭さんに告白、とか言ってたんだよな。もうこんなになつたのか…。

坂下が絶望的な顔で口の端を歪ませる。

「もうこれは多少の不正行為に頼るしか」

「そちも悪よのう」

「いえいえお代官様ほどでは」

なにやっつてんだ、僕ら。

「なにやっつてんの？」

大河内が少しひきぎみに突っ込みを入れた。

「あーあー、キミキミ、優等生は去りなさい」

「何言っつかこの」

軽く喧嘩を始めようとしたところで、

「男子っつてほんとバカよねえ」

という、遙の声が聞こえた。

目線がこつちを向いているように思うのは、気のせいか。

「悪かったな」

とりあえず言い返すと、

「誰もあんたらの事とは言っていないでしょ。反論するってことはどつかやましい部分があるからなのよ」

うあ。正論で攻めて来やがった。

「あ、あの」

秋庭さんだった。大分緊張気味だ。

「えっと…勉強会、しませんか」

勉強会？

大河内が不思議そうな顔をした。確かに珍しいけど、そこまで不思議か？

「面白そう！あたしも入れて！」

遙が食い付いて来た。

「場所は？」

「あ、私の家でどうですか？」

「うわー！秋庭さんの家！？」

「行きますー！」

「俺も」

「んじゃ僕も」

「僕も行つていいかな？」

「ん？一人多くないか？」

「うわっ一崎！」

「なんだようわつて。失礼な」

いつの間にか一崎が後ろに立っていた。

「いやいや、最近出番少ないし、皆忘れてないかなーと」

「なんの話だ？」

「こつちの話だよ」

世の中にはトップシークレットがあるのです。

「佐々さんは？」

「ん？ああ、うちは用事あるから」

佐々さんの用事。皆薄々感付きつつあるけれど、誰もあえてそれを口にしない。

転勤族…か。

秋庭さんが少し、寂しそうな顔をした。

「日にちは？」

一瞬静まった空気を、大河内が破る。

「あ、いつでも大丈夫なのですが…」

「そうだねえ。土日は自分で勉強した方が良さだろうし、今日か明日かな？」

さすがに大河内、勉強は得意なのだ。

「そうですね、大丈夫です。学校帰りまっすぐでも良いですし」

一崎が手を上げた。

「あ、俺今日はちょっと」

「あたしは明日無理…」

遙も続ける。

秋庭さんは数瞬考え、

「それじゃあ今日と明日、二日やりましょっつ」という結論となった。

\*

待ちに待った放課後。ついに秋庭さんの家に…！  
大河内達は掃除があるので、地図を渡して、先に秋庭さんと二人  
で行くことになった。

ちよつとちよつと。一生分の運使いきったかも。

出発前、佐々さんに呼び止められた。

「桜に気を付ける」

桜？一体なんの事だ？

しかしこの後、僕は身を持って桜の悪夢と対峙するのだった…。

他愛のない話をしながら道を歩く。

「秋庭さんって兄弟いるの？」

「ハイ、兄が一人います」

意外。秋庭さんって妹だったのか。

「へえ、僕は妹がいるよ」

秋庭さんはくすつと微かに微笑んだ。

「ちよつと逆ですね」

あー！うちの妹も秋庭さんみたいだったらいいのにー！

あいつは全く可愛いさの欠片もない奴だ。世の妹萌えとかいうの  
を本気で疑う。

まあ、秋庭さんなら別だろうけど。

一瞬、最初に見た秋庭さんの笑顔を思い出した。

もう六月か…こんなにたったんだな。

あの時秋庭さんは誰かと一緒に歩いていて…

…ん？『誰か』？

秋庭さんは誰と歩いていったんだ？

…確か男だった気がする。

彼氏はいないって言っていたけれど

心臓が早鐘のように脈うつ。

「ここです」

そうしている間に、秋庭さんの家に着いた。

しかし頭の中は記憶を掘り起こす事で精一杯だ。

秋庭さんがチャイムを鳴らす。

ドタドタと音がし、数秒後、ドアが開いた。

「よお。おかえり」

瞬間、僕の記憶は全て繋がった。

秋庭さんと歩いていた人

この人だ。

## 第十七話：桜の悪夢と僕らの夢

この人だ　この人は、一体：

「あ？誰だてめえ」

初対面で険悪な目つきで睨まれた。

「ちよつと、お兄ちゃん、いきなり……」

ああ、秋庭さんのお兄さんか……。

安堵で力が抜けた。

「すみません、兄です」

相変わらず睨まれたままである。かなり怖い。

「秋庭桜。仲良くしましょうや」

桜さんは、うってかわって、笑顔で握手に片手を差し出してきた。

「痛ッ!？」

素直にとつた手を、信じられない握力で握り返して来る。

ちよつと、痛いんですけど。というか、ゴリゴリと骨が軋む音が

聴こえてるんですが。

しかし、桜さんは笑顔を崩さない。心なしか、さっきよりこつ……

なんとというかニヤリとしているような。

それより、そろそろ手が折れます。絵筆が持てなくなってしま

います。

つか、ホント痛てえ!!

佐々さんの言ってた意味がやっとわかった……『桜に気をつける』

ってこのことか……!!

もう少し、具体的に教えてほしかったなあ……。

「……何してるんですか？」

秋庭さんがいつまでも握手をし続ける僕らに、不信な目を向けた

のは言うまでもない。

\*

中に入るなり、桜さんはダッシュで上に上がった。

「あっ!?!」

後から上がった秋庭さんの驚愕の声が聞こえる。

「私の部屋が滅茶苦茶に…」

桜さんだ。

「残念だったな、紅葉。勉強は居間でやるといい。俺がしっかり見張ってやる」

…しかし手段が姑息だなあ…。

秋庭さんが居間のテーブルを準備している間、こっそりと桜さんに呼ばれた。

秋庭さんの手伝いをした方が良いのだろうが、拉致に近い勢いで桜さんに引つ張られる。

「おい、お前なんで紅葉が勉強会なんてやろうとしたかわかってるか」

「え?」

は…、と桜さんは深くため息をついた。

「あのなあ。紅葉が友達を家に連れて来ること自体物凄く珍しいんだよ」

「……」

「ましてや、勉強会。勉強するのは大勢でやるほど効率が悪くなるものだし」

そうなのか。ようやく大河内が不思議そうな顔をした事に納得がいった。

「あいつは多分、今の状況を一時の夢か何かだと思ってる。だから、テストが終わる頃には今の環境が無くなってしまっ気がして、テストの終わるまで待てなかつたんだな」

…僕はそんな秋庭さんの気持ちに、ひとつも気づけなかった。

「お前、紅葉のことどう思ってる?」

「どっつて…」

それは、

「嫌いとか言ったらぶっ飛ばす」

「嫌いなわけではないじゃないですか」

「好きとか言ったらこの世から消す」

「……」

好きなのですが。

「じゃあ何て言ったらいいんですか」

「しがないただのクラスメイト・友人Aと言え」

ちょうどその時、玄関のチャイムが鳴った。

桜さんが飛んでいってドアを開ける。

「こんにちはー」

まずは笑顔で遙を迎え入れた。

そして、坂下と大河内に向かって眼光を飛ばす。

「お前は？」

坂下が答えた。

「しがないただのクラスメイト・友人AとBです」

「よし！お前のことは気に入った！まあ、入ってくれ」

桜さんは僕のほうに戻ってくると、小声で、

「つい、四人来るって言ったうちの三人が男ってどういうこと？

人の妹にきやすく近寄るなよ」

桜さんは尚も問い詰めた。

「お前、紅葉に告白したんだって？」

「!？」

何で知ってるの!？

「俺の情報網を侮るんじゃないぞ。で？返事は？」

返事：秋庭さんからの、返事。

「まだ…です」

「ふーん。振られたんじゃないか？」

うわ。何て事を。

僕にとどめを刺すと、桜さんは居間へ戻っていった。

返事か…。

結局、僕は怖かったのかもしれない。

秋庭さんが果たしてなんというのか。

答えを聞いた瞬間に、ふくらんだ風船に針を刺したときのように、この環境が消えてしまう様な気がして。

『あいつはこの状況を一時の夢か何かだと思ってる』

桜さんの言葉が脳裏に蘇る。

きつとそれは、僕も同じ。

今のこの世界は、夢という領域を離れて、現実となる日が来るのだろうか？

ねえ秋庭さん、君は

僕のことを、どう思っているんだい？

## 第十八話：化学反応式と夢みたい現実

「さあーで、勉強始めますか!」

珍しく坂下が勉強というものに対し、やる気を出した。

「おー!」

見れば、秋庭さんや遙もなんだか楽しそうだ。

友達がいるっただけで、楽しいからな。そりゃあ効率が悪い筈だけれど、勉強会というものが廃れないのは、その独特の楽しい雰囲気のおかげなのだろう。

「んじゃ、まず何からやってく?」

「はいはい、科学やりたい!」

そもそも正式な勉強会のやり方を知らないのだが、とりあえず遙の一存で科学を最初にやることとなった。

「えーと、範囲は化学反応式だね」

「よーし何でも問題出してくれ」

実は科学はちよつと得意だったり。

「その1。プロパンを燃焼すると二酸化炭素と水が出来る。この場合の化学式を答えよ」

……いきなり難問?

「まずプロパンが $C_3H_8$ でしたよね。モデルを描いて……  $C_3H_8 + 5O_2$        $3CO_2 + 4H_2O$       でしょうか」

ノートの上でせわしなくシャーペンを動かしつつ、秋庭さんが澀みなく答える。

「さすが。正解」

へえ：やっぱり頭いいんだなあ。

「秋庭さんすごい」

秋庭さんは照れたように縮こまっていた。

ほめられることに慣れていないのかもしれない。

学校では滅多に見れないその姿がなんだか可愛らしかった。

あー、勉強会来て良かった…。

「あのう…」

坂下がおずおずと手を挙げる。

「何？」

「素朴な疑問を一ついいでしょうか」

何で敬語？

そして、怖ろしい事を訊いてきた。

「化学反応式って何？」

長い沈黙。

「ナニイーーー！！」

全員の目が点になって、絶叫した。

秋庭さんも、こればかりは眼鏡がずり落ちそうだと。

見れば、桜さんまで悲鳴を上げている。

さすが兄妹。驚いた時の顔が微妙に秋庭さんと似てるかも。

…いやいや、そうじゃなくて、

「なんてこと訊いてんだお前は！」

「だってわかんないんだよ」

「…それはこれまでの科学の授業 それも中学から を全て聞いていなかったと見て良いのでしょうか」

坂下はにっこりと微笑み返してきた。

この場合、僕はどんな対応をとれば良いのかな？坂下君。

「…大河内、頼む」

結局、大河内に説明を頼むことにした。

「了解…。秋庭さんと小野寺さんは他の教科でもやってってくれるかな？」

「オーケー」

遙が呆れたように言い、まだ驚きの覚めやらぬ秋庭さんは、こくと頷いた。

「まず原子と分子はわかる？」

「そのぐらいはわかる。水がH<sub>2</sub>Oってやつだろ」  
「わかってんじゃない。」

「H<sub>2</sub>+O H<sub>2</sub>Oって感じに化学変化を式で表したものとだよ」

「マジで！？それでいいんだ！難しく考えすぎてたわ」  
内心ため息をつきつつ、秋庭さんと遙の方を見た。

「It is no use crying over spilled milk.これの和訳は……」

「どうやら英語をやっているらしい。」

「何かのことわざらしいのですが……」

二人がそのまま考えあぐねていると、さっきからずっとずいずいした桜さんがすかさず割って入った。

「よしよし、僕が教えてあげよう」

僕？この人ってホント女子組には親切だな。

「It is no use crying over spilled milk.では？」  
意味だから、It is no use crying over

「あつ、わかった！『こぼれたミルクを嘆いても無駄だ』！」  
遙が弾けるように答えた。

「ピンポン。つまり『覆水盆に返らず、後悔先に立たず』ってこと」

「桜さんすごい！！」

「いやあ、大したことじゃないよ」

しかし本人、まんざらでもなさそうな顔をしている。

「桜さんっこつちも教えて下さい！」

坂下の手がパツと拳がった。

が、

「はっ。男は苦しむがいい」  
軽く鼻であしらわれた。

それも、シツシツと、ご丁寧到手ぶりつき。

「お兄ちゃん…」

秋庭さんの視線を受けるなり、桜さんの態度が180度変わった。

「むっ、何だ紅葉の為ならしょうがない。お前ら紅葉に感謝しろよ」  
思わず苦笑してしまった。

何か、こういうのっていいなあ。

兄妹…。うちの妹は可愛さのかけらもないからなあ…。

それだけじゃなく、僕はあいつに申し訳なさを感じているのもあるのだけど。

幼い妹から、家族から、僕は

「蓮？どうした？」

大河内が心配そうにこつちを見る。

「いや、なんでもない」

大河内と坂下、それに遙のおかげで最近はそのときのことを思い出すことも少なくなってきたけれど。

いや、そうじゃない。

秋庭さんのおかげだ。

高校生になって、秋庭さんと会って。

だんだんだんだん、僕は救われていったのかもしれない。

秋庭さんの横顔をそっと盗み見る。

秋庭さんは、小さく微笑んでいる。

前より、よく笑うようになったな。

この笑顔に、僕は弱いんだ。

『この状況を、あいつは一時の夢かなにかだと思ってる』……か。

確かに皆が皆、なんでもないことで笑いあっている今。それは夢  
みたいだという他に、どんな表現があるのだろう。

でも。

目を開ければそこに君がいて、手を伸ばせば君がいる。  
それは確かに、現実じゃないか。

秋庭さん、この世界は夢じゃないよ。

「さーてと」

僕はシャープペンを取った。

「気合いれて勉強しますか」

## 第十九話：フェルマーの定理と秋庭さんの問いかけ

…一つ、僕の中で気になる事があった。

今までもずつと気になってきたけど、何とか考えない様にしてきた、そんなもの。

それは、「結局秋庭さんに告白してどうなったんだっけ!？」というものである。

まあ、今は勉強会中の訳だし。勉強、勉強。

しかし、人間一度気になりだしたものは止まらない。まったく勉強に集中出来なかった。

そもそも、何でいきなりこんなことが気になりだしたんだっけ? あ、多分さつき桜さんに「返事まだ? 振られたんじゃない?」って言われたせいだ。まったく、あの人は何てことを言うんだ。

…結構クリティカルヒットだったり。

「おい、上城? 蓮」

気がつくと、大河内が僕の目の前で教科書をぶんぶん振っていた。「なにやってんの? 百面相は見てて面白いけどね。…それより、ルーズリーフ」

「えっ? ああ!」

大河内に言われて初めて手元を見た。

ルーズリーフの上に書かれた字…らしきものはもの見事にぐちゃぐちゃで、しかもそのルーズリーフ自体が乱暴に掴まれて滅茶苦茶になっていた。

「誰がこんなことを!」

「お前だ」

…大河内にツッコミ役を奪われてしまった。相当だな…。

「フェルマーの定理はワイルズが証明するまで350年かかったっていうけど、君の行動はそれ以上の難問だと思うよー」

「そりゃどうも」

すると、科学反応式を理解した坂下が話しかけてきた。

「なあなあ、何か科学反応式の問題出してー」

「水の記号は」

「馬鹿にすんなよ。H<sub>2</sub>Oだろうが」

「そっぴやさつき答えてたっけ。」

「酸化マグネシウム」

「さ、酸化…?」

「おいおい！まだ中学の範囲なんですけど！」

「参加することに意義がある！」

「違うわ！」

「ちなみに解答はMgO。」

「つ、次！」

「硫化鉄」

「鉄はFeだったよな」

「おっ、次はいけるかも。」

「だが、こいつに期待したのが間違いだった。」

「エフィーの家をー見に行こうー」

「ああ、聞き覚えのあるCMソング！しかもエスपीだよ、たしか。」

「桜さん数学教えてー」

逃げたな。

しかし、意外なことに桜さんの顔色が変わった。

「数学だと…?」

腕はわなわなと震えている。

「フン。自分でやりやがれ」

その時、遙の腕が上がった。

「桜さん、私も数学教えて下さい」

「うっ！数学…。しかしこの秋庭桜、女の子の頼みは断れない性分  
でね」

「どうやら桜さん、数学は苦手らしい。」

だが、数学といえばもちろんこの人。

「あ、数学なら僕が教えるよ」

そう、大河内。

「この線分と線分が平行だから、和分の積で、

F

「すごい、大河内！」

大河内はあつという間に三角形の相似を証明し、遙の奨励までうけてしまった。

どうやら、それが桜さんの琴線に触れたらしい。

「…お前は気に入らん！」

なんてわかりやすい人だろう。

\*

…桜さんのおかげで秋庭さんと話すことはおろか、近づくことさえ出来ない。

桜さんは、秋庭さんの周囲を仁王立ちで監視しつつ、守護バリアを張りまくっている。

と、大河内がルーズリーフにメモを書きつけ、遙に手渡して、小声で何か言った。

「桜さん、この問題がわからないんですけど、やってみてくれませんか」

遙が桜さんにルーズリーフを手渡した。

書かれていたのは、『もしnが2より大きい整数である場合には、 $X_n + Y_n = A_n$ をみたすようなどんな整数も分数も存在しないことを証明せよ』、という問題。

「うっ！しかしさっきの雪辱戦：ちょっと待っててくれ」

桜さんは、遙の隣に腰を降ろすと、ルーズリーフとの睨み合いを始めた。

「ちよいちよい、上城」

大河内に小声で呼ばれた。

「今のは？お前が遙に渡したやつだろ」

大河内は頷いた。

「フェルマーの定理。さっきの証明するのに三百年かかったやつ。

絶対出来ないから、桜さんがやってる間に秋庭さんと話してきなよ」

「えっ!？」

「ほらほら、急いで」

「ありがとう大河内：こんど何かおこるわ」

ホントに恩に着る。

僕は、ありがたく秋庭さんの近くに席を変えた。

隣だと桜さんに気づかれるので、少し間を空けて。

「秋庭さん、今何処やってる？」

「あつ、上城君。今は英語です」

僕も英語の教科書を開いた。

当然だけど、秋庭さんの方が頭が良いから、同レベルで勉強とは中々いかないけれど、美術なら僕にも教えられる。

秋庭さんに英語を教えてもらって、美術を少し僕が教えて。

うん。生きてて良かったよ、ホント。

ただ、その時僕は気づかなかつたけれど、僕と秋庭さんの手助けをしてしまった遙は、幾分複雑な顔をしていた。

\*

「それじゃあ、そろそろおいとまします」

「お邪魔しましたー」

遙以外にもう来るな、という顔をしている桜さんを背景に、勉強会は終わった。

秋庭さんが外に出て、見送りに来てくれる。

「また来てくださいね」

「…秋庭さん」

皆が先に行ったのを見計らって、僕は遂に秋庭さんにそれを訊いた。

「告白の返事、聞かせてもらいたいんですが」

「……！」

秋庭さんは、凄く驚いた顔をした。

長い、沈黙が場を満たす。

本当は一瞬の間だったのかもしれない。けれど、今の僕には、その間は酷く長く感じられた。

「……」

秋庭さんは、口を開く。

そして、僕にとって予想外の質問を投げかけた。

「上城君は、私のどこが好きなんですか？」

何故だろう。

僕は、その時秋庭さんの問いに答えられなかった。

## 第二十話：答えの出し方とフェルマー再び

「私の何処が好きなんですか？」

秋庭さんの言葉、表情、あの場にあつた全てが、木の葉の一枚までありありと蘇る。

まるで、止まってしまったビデオテープをずっと見続けているように。

…正直、考えたこともなかった。

「じゃ、バイバイ。また明日」

「俺も」

遙と坂下が抜けた。

坂下は方向が違うが、遙は僕達と同じ方向の筈。

「？遙はこつちじゃ…」

「本屋よるから」

そっけなく言つて、遙はずんずん道を歩いて行つた。

坂下が「あつ、ちよい待て」と慌てながら追いかける。

ふつと、大河内がため息をつきながらそれを見送つた。

「で、君は一体何を悩んでいるんだい？」

「えっ？」

「バレバレなんだよ。何年の付き合いだと思つてるのさ」

「……」

ふと、大河内に訊いてみた。

「大河内は数学の何処が好きなんだ？」

「それ毎年訊いてない？」

「いいから」

大河内は数秒考え、口を開いた。

「うーん…まずは答えが必ず一つってところ」

答えは、一つ。

それは、僕の問題にも当てはまるのだろうか。

「それと、『答えに辿り着くための方法はいくらでもある』ってところ」

大河内は、「あとはわかんないや。なんとなく？」と、穏やかな表情で両手を広げた。

「ちなみにこれは数学以外にも結構当てはまるんだよ」

「方法はいくらでも…か」

答えを出す道筋はいくらでもある…。

「フェルマーの話しただろ？フェルマーは『算術』という本を読みながら、浮かんできた答えをその本の余白に書くのが癖なんだけど、『この一般定理の>真に驚くべき証明を発見したが、残念ながらこの余白は狭すぎて書けない』ってというのが大体で、その証明についての答えはほとんど明かされていなかったんだ」

大河内は一旦息を吸って続ける。

「特に、<フェルマーの最終定理> さっき桜さんに渡したやつは、ワイルズが解くまで350年も誰も解けなかったもんだから、『フェルマーは勘違いをしていたのだろうか』とまでいわれたんだよ」

でも、と大河内はにっと笑った。

「定理は 解けた」

そして、僕の方をくるりと振り返る。

「何でだと思っ？」

「何でって…」

僕はまた、答えられなかった。

だが、大河内は実に簡単そうに答えた。

「その答えが正しかったからだよ」

正しかった、から？

「何悩んでるか知らないけどさー、その答えが正しければ、問題は  
いずれ解けるんだよ」

何だか、一気に道が開けた気がした。

『秋庭さんの何処が好きなのか証明せよ』

数学風にいうところなところだろうか。僕が秋庭さんを好きだとい  
うのは、確かだ。ならば、この問題の答えもまた、正しい。

それなら問題は 必ず解ける。

「サンキュ、博士」

「どういたしまして」

博士というのは、中学時代の大河内のあだ名だ。

「しっかしよくいろんなこと知ってるよなー」

「本の受け売りだよ。『天才数学者達が挑んだ最大の難問』や、『  
数学をつくった人々』とか」

「…絶対読まないな」

けど、今は珍しく、少し読んでみようか、という気持ちにもなっ  
た。

「どうやら吹っ切れたようだね」

「うん」

心の中に立ち込めていた暗雲が一気に晴れた気分。

答えは、出た。

## 第二十話：答えの出し方とフェルマー再び（後書き）

ここまで読んで頂きどうもありがとうございます！

大河内が読んでいた『天才数学者達が挑んだ最大の難問』と『数学をつくった人々』は実在します。

二冊とも、非常に面白いのですが、非常に難解で、読むのに異様に時間がかかります。

でもオススメなので、興味のある方は是非。

ちなみに、天海が数学好きという訳ではありません。

他のキャラはオリジナルですが、大河内にはモデルがいたりします。

**第二十・五話：遙と坂下とオヤジの頭（前書き）**

ちよつと番外になります。

前半が遙視点で、後半は坂下視点です。

## 第二十・五話：遙と坂下とオヤジの頭

「あの、告白の答えを聞かせてほしいんですけど」  
聞いてしまった。

さつきも、蓮と秋庭さんの手助けをしてしまった。

あんなに楽しそうな蓮は、あたしの隣では滅多に見られない。

あの、雨の日から。

楽しいことも、哀しいことも、何もかもを蓮から奪い去ってしまったあの雨から、坂下と大河内に出会うまで、蓮は何も感じなくなつた。

好きな人が出来るなんて有り得なかつた。

「ホントに告白、したんだあ……」

晴れて澄み渡つた空とは対照的に、あたしの気持ちは、深い深い泥の中に沈み込んでいった。

もう、あたしの入る隙間は無いかもしれない。

でも、蓮にしてみればこれは良いことなんだ。

好きな人が出来て、雨に流されたものが還ってきて。

それなのに、何で？

何であたしはそれを喜んであげられないの。

「本屋よるから」

今は、蓮の隣が辛くて、嘘について脇に曲がった。

「あっちよい待て」

なんでだか、坂下が後ろを追いかけてきた。

「何で来るのよ」

「ん？そういや何でだ。何か気分？」

坂下はぼりぼり頭をかく。

「気分って何よ。ついてこないですよ」

「方向が同じなんだよ」

「嘘つけ。あんたこつちでしょ」

ぴっ、と左の道を指差す。

すぐばれる嘘なんかつくな。

でも、何でついてくるのかは本当にわからなかった。

「蓮と秋庭さん…か？」

「…！」

悩みの原因を言い当てられて、びくりと体が震えた。

「どつという意味よ」内心の動揺を悟られないように、平静な声を装ったが、硬くなった声が逆に動揺を伝えた。

坂下は、いつもと違う真面目な顔をしていたが、あたしはそっぽを向いていて見えなかった。

「そのままだよ。蓮が秋庭さんに…！」

嫌だ。聞きたくない。

自分で思っておちこむだけならまだしも、他の人から其れを聞くのは、事実を認めさせられる気がして嫌だった。

「急いでるの！じゃあ！」

逃げるように、道を駆け出した。

というより、逃げた。

坂下の方が足が速いから、走られたら追いつかれてしまうけれど、向こうも追っては来なかった。

視界の端に、空が見える。

空は、何処までも透明で。

空はこんなに綺麗なのに、どうしてあたしはこんなにも汚いんだろう。

「本屋よるから」

「あっ、ちよい待て」

反射的にそう言っつて、俺は踵を返した小野寺の後を追いかけた。  
「何で来るのよ」

「ん？そっついや何でだ。気分？」  
ホントに思わず来てしまったものだから、訊かれても理由なんて全然わからなかった。

ただ、小野寺がなんとなく辛そうで、なんとなく来てしまったと言っただけで。いや、ホント。

「…蓮と秋庭さん…か？」  
「急いでるの！じゃあ！」

何気なく、思い当たった節を訊いてみたら、ジャスト地雷だったらしい。

そのまま小野寺は走り去って行ってしまった。  
走ったら簡単に追いつけるだろうけど、行かなかった。  
どうせ、俺が行ったつて小野寺は喜ばないだろうし。

「あー、やつちまった……」  
何で俺はいつも余計なことを。  
蛇の絵かいたら絶対足つけるタイプだな。

小野寺はもう見えなくなっていた。  
走り去っていった後のがらんとした道を見て、ちよっと思った。  
幼馴染は恋愛対象にならないつて、昔から言うのにさ。  
現に、蓮はちつとも小野寺をそっついう風には見てない。

「なのに、なんでお前は好きになつちまったんだよ……」

俺があいつらと会つたのは中学からだから、小学校の間に俺が知らない何かがあるのかもしれない。

蓮のことなら大抵知つてるけど、小野寺に関しては驚くほど何も知らなかった。

「あー、俺の気持ちもオヤジの頭だぜ」  
つまり、不毛つてこと。

ふと見た空が、滅茶苦茶に青かった。

それがあまりにも、綺麗過ぎて。

……ケンカ売ってんのか空！

なんか空にちよっとムツときた。何もこんな雲ひとつない青空ってさ。

少し雲がある位がいいんだよ。

## 第二十一話：飛び蹴り突っ込みと答えの伝え方・本番編

朝。小鳥のさえずり、目覚まし時計の音。

僕は、もぐら叩きと同等の反射神経で目覚ましを止めた。

もぐら叩きのスピードって、結構速いんだな、これが。

よし、あと五分……。

「起きろ！六時だぞ！」

「おわ！」

ノックもなしに、ズカズカと部屋に入ってきた侵入者によって、布団を剥ぎ取られる。

「起きろって言うてんだろ。きこえねーのか」

「ぐはっ」

そのまま、容赦なく背中に蹴りを入れられ、僕の体はベッドから落ちた。

フローリングの床は冷たい……。

信じられないことに。まことに信じがたいことに

僕も信じた

くないのだが

この騒がしい侵入者の名は、

かみしろりん上城琳。

僕の妹だ。

遺伝学的には。

「朝ごはんと弁当」

そうして琳は、僕にふわふわの卵焼きが入った弁当箱……ではなく、空の弁当箱を差し出した。

ほほう、僕に朝ごはんと弁当を作れと。

「普通こういうのは妹が兄貴に作るもんだろ」

「気持ち悪いこと言うてんじゃねーよ」

「なんだと！？妹としてだな、そもそもお前はホントに女か」

元祖、とび蹴り突っ込み！

反抗期の妹を持つ兄は辛い。

こうして、僕の朝は、凶暴な妹に起こされ、朝ごはんと弁当を作

ることから始まる。

「おはよう、母さん」

テーブルの方に声をかけ、弁当を詰める。

わざわざ早起きして、人に弁当を作らせるのだから、姑息なやつだ。

まあ、琳は壊滅的に料理がへただからな……。

心中でぼやきながら「ほら」と、僕は、琳にふわふわの卵焼きが入った弁当箱を渡した。

その後、ベーコンエッグの皿を二枚、テーブルの上に置く。

天気予報を見ながら、会話もそこに朝ごはんをつまんだ。

「いってきます」

「いってきまーす」

そうして、僕らは母さんに　玄関横の写真たてに声をかけ、学校へ向かう。

\*

『わたしの何処が好きなんですか？』

答えは、出た。

後は、それを秋庭さんに言うだけだ。

「あっ」

ちょうどその時、玄関で秋庭さんに会った。

「……」

秋庭さんは話しづらそうにしている。

昨日の今日さからな。実を言うと僕も少し話しづらい。

でも、大丈夫だ。

僕はなるべく、落ち着いて言った。

「おはよう」

「おはようございます……」

良かった、返事を返してくれた。

「昨日の事だけだ」

「! !」

秋庭さんは驚いたが、そのまま言うことにした。  
どこから言ったらいいだろう。

「ちよつと色々あつて、僕はもともと誰かを好きになることなんて  
無いはずだったんです。

でも、何でか秋庭さんが気になっちゃって。

……結局、何処が好きかって言われると、強いて言えば……」  
一度息を吸って、一気に言うことにした。

「人の心を動かす所」

……なんかくさくないかこれ。

でも、確かに、昔の僕には心が無かつたんだと思う。

何にも関心を示すことが出来なくて、本当に自分がここに居てい  
いのかもわからずに。

そのおかげで、妹にずいぶん苦勞をかけてしまった。ひねくれる  
のも無理ないよな。

僕が始めて大量の血を見た、あの日から、友人達と出会った日ま  
で。

秋庭さんは、黙っていた。

そして、ゆっくり口を開く。

「……ありがとうございます」

ほつと、僕は心中で胸を撫で下ろした。

「それで……私は上城君、他の人よりすごく話しやすいと思います。  
だから……この間の話、オーケーです……」

「? ……ええ! ?」

一瞬、この間の話というのが、何のことかわからなかったが、直  
ぐに気づいた。

これはもしかして、告白話に、オーケーサイン？

## 第二十二話：右ストレートと雨乞い

え……本当に？

今起こった出来事を、頭の中で反復してみる。

えーと、秋庭さんに、答えを言っ、告白話にオーケーと言われ  
て……。

うん、夢だな。間違いなく。

確認の為に、右手をグーにして、思い切り自分の頬を殴ってみた。

「ぐはっ」

「か、上城君？」

何故だ。滅茶苦茶痛いんですけど。

「グッドモーニン、皆の衆」

玄関から入ってきたのは、坂下だった。

「坂下、僕を殴ってくれ」

「え、蓮ってMだっけ？」

「違うわ！」

坂下は、僕の後ろに、秋庭さんがいるのに気づいた。

「そうか……失恋の痛みに、現実を夢と思いたいのだな……わかつた、俺が目覚まさせてやろう！」

いや、失恋してないし。どっちかっていうと、逆なんですけど。

そうこうしてる間に、右ストレートが決まった。

嗚呼、やはり痛い。

ってことは、夢じゃないのか……。

\*

「ちよっと蓮、その顔どうしたの！？まさか、ケンカとか？」

あれから、一度保健室に寄って、顔に湿布を貼ってもらったのだ。  
坂下、ちよっとやりすぎ。

「いや、そんなんじゃない」

「まあ、あんたがケンカするわけないか……坂下とふざけて殴られた、つてとこでしょ」

「以外に鋭いな、ほぼ当たりだ。」

「何年の付き合いだと思ってるのよ。その位お見通しお見通し」

「さすが。……おい、お前ら何やってんだ」

坂下と大河内が不審な動きをしている。

机の上に置いた紙に、奇怪な紋様や言葉をびっしりと書き、呪文の様なものを唱えている。

「何って、雨乞い」

だから、何で雨乞いしてんだよ！

「休み明けたらテストだからさ……」

僕の背中に寒気が走る。

そうだった、テストがあることをすっかり忘れていた。

「坂下はわかるけど、何で大河内まで？」

「退屈だったからねーでも、心配ない。僕が割り出した計算では、  
99.0867%雨だよ」

かなり微妙な数字だな。

試しに遙に訊いてみる。

「これは予測できたか？」

遙は高速、いや音速で首を振った。

「前言撤回。バカトリオの行動は予測不可能」

ん？トリオ？もしかして、僕も入ってたりする？

大河内がにやりと笑いながら反論した。

「馬鹿じゃないもんね、学年トップだもん」

「うっわ、何それ！ムカツクー！」

これは、僕と坂下も遙に賛成である。

「え、ちよつと君達、ここは友好に話し合っべき……ッ」

「ご愁傷様。」

それにしても、これは本当に夢じゃなく、現実なんだな。  
放課後になっても、まだ実感が持てないけれど。

もしやこれって、世間一般でいう、力で始まって、四文字で、ラ  
行の三番目で終わるやつか!?

いや、この言い方はちょっと古いかな。

「あの……」、「この言い方はちょっと古いかな。

「あの……」、「ハイッ」

秋庭さんだった。

思わず、授業中、寝ている時に当てられた生徒の様に返事をして  
しまう。

「色々考えましたが、付き合って、何をすればいいんでしょう?」

「……」

確かに。その辺はまったく考えていなかった。

何をすればいいのやら……。

「……一緒に帰るとか?」

秋庭さんは、くすっ、と微笑んだ。

「何時もとあんまり変わりませんね」

「そうだね」

何だかおかしくて、僕まで笑ってしまった。

## 第二十三話：半年とひかちくふさ

休み明け、天気は雨。

坂下と大河内の雨乞いが成功したのだろうか……。

「やったー！雨だ！」

「残念だな、テストは雨天決行なんだよ」

「え」

まさか、本気で雨天延期になると思ってたんじゃないな。

「にしても、今回全然勉強してない……」

本当にまったく、全然。

勉強どころじゃなかったんだよ。秋庭さんの家で勉強会したり、何処が好き？なんて訊かれたり、拳句の果てにOKもらったり……。

「よつするに、浮かれてたんだね、君は」

「うわっ！」

やれやれ、と大河内が首を振る。

「一人だけ抜け駆けして、勉強を疎かにするとは……お母さんはあなたをそんな子に育てた覚えはありません！」

「育てられた覚えはありません！」

大河内に育てられるだなんて、そんな、呪怨より怖ろしい。確実にグレルぞ。

「にしても、もう前期の期末かあ……」

しみじみと坂下が呟き、大きく息を吐き出す。

「もう、半年経ったんだな」

その言葉に、はっとした。

窓の外を吹く風は既に冷たく、それに揺られて、色付き始めた樹から枯れ葉が落ちてくる。

半年。

本当に早いなあ、と思う。

僕らがどんなにゆっくり進んでも、時間の方はけして待ってはく

れないのだ。其れは、誰にでも平等に。

その刻の訪れを明確に知らせるように、始業の鐘が鳴った。

「はい、席について、教科書をしまつて」

……これは待つてほしかったな。

\*

マズイ。これは非常にマズイぞ。

NaHCO<sub>3</sub>って何？何かの暗号？携帯入力に変換してみよう。  
ひかちくふさ、余計にわけわからん。

次行こう、次。

えーと、プロパンの化学式……。

諦めかけた時、突然、頭の中で秋庭さんの声が蘇った。

そうだ、秋庭さんの家で勉強会したじゃないか。

確か、この問題、その時に秋庭さんがやってたやつで……。

よし、書けた。

授業中に先生が言った事は思い出せなくても、秋庭さんが言った  
言葉ならば、僕は容易に思い出せる。

それがどんなに些細な事でもさ。

僕はシャープペンを握り直す。これなら、化学はなんとかかなりそ  
うだ。

\*

「どうでした？」

何とか一日目が終わり、秋庭さんに調子を訊かれた。

「うーん、英語がなあ……」

あの後、勉強会の事を思い出しながら答えを埋めていった僕は、  
あるところか、桜さんの事まで思い出してしまった。

それから先は、桜さんの視線を背後に感じて、まったく集中でき

なかったのだ。

いる筈ないとは思いつつ、あの人なら、本当に天井にでも張り付いていそうで……。

実際、妹である秋庭さんのためなら、どんな妨害も惜しまないだろう。

「そうだったんですか。私も、英語は他と比べると自信ないです」  
秋庭さんはそう言ったものの、彼女ならきつと90点は取ってしまっただろう。

けれど、嫌味とかではなく、僕を気遣って言うてくれたことがわかって、ちよつと嬉しかった。

「あ、でも」

確かに英語は駄目だったけど。

「化学は中々いい感じだと思うよ」

どうもありがとう、秋庭さん。

## 第二十四話：地獄のテスト返しと『話しやすい』こと

秋庭さんが告白話をオーケーしてくれた理由はなんだった？  
僕は記憶を遡る。

そうだ、『他の人より喋りやすいと思うから』だった。

\*

「うわああああ」

各々の教室から、悲鳴が響き渡る。

中には、「もう駄目だ」「殺される」「等」という声もあった。

期末テストが過ぎ去った今、僕ら善良な学生を恐怖の底に叩き落すのは何か？

そう、『テスト返し』である。

「蓮、どうだった？」

遙に訊かれた。

「ノーコメント……」

幾らなんでも、これを言うのはちょっと。

「四の五の言わずに見せなさい」

「うわっ！？ なにすんだ！」

時既に遅し。

テスト用紙は僕の手から消え、遙の下へと渡っていた。

「……？ 全然悪くないじゃん、これ」

「え？」

僕はそのテスト用紙を確認する。

ああ、化学か……。

「まあ、化学だけは」

他の教科は本当に目も当てられなかったが、化学だけはまともな点数を取る事が出来た。

それに関しては、秋庭さんに本当に感謝している。

「ホントに化学だけねー。うわ、英語なんか大変」

「だから、見るなっ」

言うなり、僕はひったくるようにして、遙からテスト用紙を奪った。

いや、奪うというか、元々僕のだけどさ。

「ねえ、今度皆で遊びに行かない？期末打ち上げパーティー！」

それはいいかもしれない。けれど、遙は直ぐに浮かぬ顔になった。

「あ……でも、蓮は秋庭さんと付き合ってるんだっけ」

「なっ」

あんまり大きな声で言われると恥ずかしい。

「……蓮から告白したんだっけ？」

「……まあ……」

「秋庭さんは何て言ってOKしたの？」

「？」

何だ？やけにしつこいな。

遙は大抵こういう話に深入りしないタイプの筈だけど。

「いいから」

何だか変だ。

僕は、とりあえず記憶をたぐり寄せる。

『他の人より話しやすいと思います』

「」

今まで、この言葉の意味を深く考えた事はなかった。

ただ、OKしてもらったことに浮かれていたんだ。大河内の言うとおり。

『話しやすい』って、どういう風に？

遙とは、話しやすい。多分、女子の中じゃ一番話しやすいだろう。でも、それは幼馴染みだから。

「蓮？」

秋庭さんは、内気な性格だ。

だから、話しやすい人間を好きと勘違いしているのか？

そう、僕が遙に対して、幼馴染みに対して思うのと同じように、

『話しやすい』？

「ゴメン変なこと訊いて。別に言わなくていいよ」

遙の言葉に、僕はいつの間にかうつ向いていた顔を上げる。

『話しやすい』という単語がぐるぐると頭を巡っていた。

こればかりは、秋庭さんに訊かないとわからない。

第二十四・五話・遙の決意と29日（前書き）

遙視点です。

## 第二十四・五話：遙の決意と29日

いつかは言わなきゃならないって、思ってた。

\*

「ねえ、今度皆で遊びに行かない？ 期末打ち上げパーティー！ テストも終わったことだし、蓮にそう提案してみた。」

「あ……でも、蓮は秋庭さんと付き合ってるんだっけ」

「なっ」

前みたいに、大河内や坂下も入れた四人でわいわいやることも、これからはなくなるのかも……。そう思うと、ちよっとしょげた。

「……蓮から告白したんだっけ？」

「……まあ……」

「秋庭さんは何て言ってOKしたの？」

「？」

蓮は不思議そうな顔をする。

確かに、普段あんまりこうい話しないから。

でも、これは他でもない蓮の事だもん。気にならない筈が無い。

「いいから」

「」

「蓮？」

何故か、蓮は黙り込んだ。

「ゴメン変なこと訊いて。別に言わなくていいよ」  
「すぐく気になる。」

秋庭さんの答えも、蓮の沈黙も。

でも、聞いたら余計辛くなる気がしたから、自分から切り上げた。ずっと、ずっとずっと片思いだった。

そしたら、片思いの間に、何も言わないうちに、蓮の前に秋庭さ

んが現れて、蓮が告白をしてしまった。

終わっちゃった。あたしはまだ何にもしてないのに。

蓮の中ではあたしは何時までも幼馴染で、恋愛対象にはこれっぽちも入っていない。だけど、いつかは言わなきゃならない。

「あ……今日って28日？」

蓮は頷いた。

「明日は29か……」

「29だから、明日は休むわ」

明日は、蓮のお母さんの命日。

そして、七年前に、あたしと蓮の未来を変えた、運命の日でもある。

だったら、決着を着けなきゃ。明日が29だからこそ。

いつかは言わなきゃいけないって、思ってた。

ただ、あたしは怖かっただけ。結果はあまりにも明白だったから。

「蓮」

「ん？」

「あたしは、蓮が好き」

## 第二十五話：ごめんとありがとう

「……え？」

言われた意味が、良く理解出来なかった。

今、遙はなんて言った？

僕のが好きだった？

そんな、まさか。遙とは幼馴染で、そんな事を考えた事は一回も無かった。

「ははっ」

遙は、渴いた笑い声をもらす。

「七年前の明日 29日から、ずっと好きだった。……ううん、好きだと思ってた」

遙は、静かに語り初める。

「お葬式するとき、泣いてる蓮を見て、あたしが側にいなくちゃ、って思ったの。だけど、いつの間にか勘違いしてたんだね。いつの間にか、蓮の事が好きだ、って思い込んだ」

遙は制服の袖口で顔を拭う。そして、きつ、と真剣な面持ちですぐ僕の方を見る。

「あれから、蓮は何をするにも空っぽで、誰の事も好きになる事が出来なかった。好きという感情だけじゃない。笑うことも、怒ることも、泣くことまで。……だけど、中学に上がって、坂下と大河内に会ったんだ」

僕はただ黙って、それを聞く。

口を挟むことなんて出来やしない。そもそも、そんなことをしようと思わなかった。

……遙は、こんなに僕のことを見ていてくれたんだ。でも、僕は僕は遙の何を見てきた？

「それから、蓮は笑うようになった。怒るようになった。泣けるようになった。でも、誰かを『好き』になることは無かった」

「でもね、と遙は呟く。

「でもね、秋庭さんが現れたの」

「蓮の前に、秋庭さんが現れたの。蓮は秋庭さんにどんどん惹かれていって、秋庭さんを好きになった。勉強も頑張って、……告白もして。そんな蓮に、あたしは惹かれた。

もう、あたしが側にいなくても全然平気なくらいに元気になったの。すっかり元に、戻ったの。なのに、あたしはどんどん蓮が好きになった。……だから！」

突然、遙は声を荒げる。そして一気に叫んだ。

「あたしは秋庭さんに恋してる蓮が好きだったんだ！」

「……！」

「秋庭さんに恋してから、蓮は変わった。本当に変わった……。それで、あたしはそんな蓮を好きになった。変わる前の蓮より、変わった後の蓮の方が好きだった。だけど……。だけど、変わったのは、蓮が秋庭さんを好きになったから……。っ」

遙はしゃくりあげる。

「まぶた瞼に溜まった涙を必死に堪えているのがわかった。

「ごめん」

僕は、謝る。

「ごめん。気づいてやれなくて、ごめん。幼馴染で、小さい頃からずっと一緒にだったのに。遙は、ずっと支えてくれてたのに……」

「謝らないでよ」

僕の言葉は、途中で遮られた。

「謝らないでよ。謝られたら、余計辛いわよ」

「……」

僕の中には、すっきりしない気持ちだけが残る。

「こういう時、どうしたらいいのか、何を言ってやればいいのかわからなかった。

お互いに何も言わず、もやもやとした沈黙だけがその場に漂う。

「秋庭さんと、幸せになって」

遙はぽつりと呟き、沈黙を破った。

「あたしが身を引いたんだ。秋庭さんと幸せにならなきゃ許さない。絶対に許さないんだから」

「……うん」

「あたしまで幸せになるくらいに。あたしが諦めた事を後悔しないくらいに」

僕は頷いた。

遙は唐突に後ろを向き、伸びをする。

「あーあ、全部言ったらなんかすっきりした。今日はもう帰るわ。帰って、やけ食いでもする」

遙は僕と目を合わさなのまま、鞆を掴み、教室のドアへ向かう。

「バイバイ」

「……遙」

遙が立ち止まる。

僕が今、言わなくちゃいけないことがある。

「ありがとう」

「……馬鹿」

遙は、教室を出た。

リノリウムの床を歩く足音が響く。

教室に一人残された僕は、徐々に小さくなっていくその足音を聞いていた。やがてふつつりと途絶え、聞こえなくなってしまっまで。

第二十五・五話・放課後の廊下と紅葉の葉（前書き）

遙視点です。

## 第二十五・五話：放課後の廊下と紅葉の葉

「……………」

全部、言った。

これで完全玉砕だ。

「小野寺？」

「坂下……………」

呼ばれて振り返ると、坂下がいた。

「わっ、どうした！？ 泣いて……………」

「蓮に、言ったの」

あたしは坂下の言葉を途中で遮った。

「蓮に言ったんだ。『好きだった』って。見事に駄目だったけどね」

「そうか……………」

「でも大丈夫。わかってたから。だって、ずっと幼馴染やってたんだもん。あいつがどんな反応するかなんて、手に取るようにわかるわよ」

「だったら、なんで」

本当は大丈夫じゃなかった。

蓮がなんて言うのかはわかってたけど、予測するのと、実際に蓮からそれを聞くのでは、大分違うから、

でも。

「決着を、付けたかったんだ」

「決着？」

坂下は訝る。

あたしは頷いた。

「七年前の明日が、蓮のお母さんの命日、っていうのは知ってるよね？ これは一種の呪いなんだ。その時にかげられた」

それは、事故だった。

けれど、蓮はそれを自分の所為にしてしまった。それが、事の発

端。

「蓮は、人を『好き』になれないという呪いを。あたしには、蓮のことを好きだと思ひ込むという呪いを」

窓の外には、見事な紅葉が広がっている。

あの子の名前と同じ、秋の庭の紅葉……。

それを見ていると、ちくりと、胸が痛んだ。

「でも、秋庭さんに会って、蓮の『呪い』は解けたから。だから、あたしだけ呪われてるわけにはいかなかった」

だから、自分で『呪い』を解く事にした。

あたしは、蓮を好きだと思ひ込んでた。

だけど、今は……。

「本当に、好きなんだけどな」

気づいたときにはもう遅かった。

それもその筈だ。秋庭さんに恋をした蓮が、秋庭さんのおかげで変わった蓮を好きになったんだから。

「……」

坂下は、珍しく静かだ。

「こら、真面目になるな。あんたは馬鹿やってんのが取り柄なんだから、もつと騒がしくお茶らけてなさい」

「……」

それでも、坂下は黙ったままだった。

普段騒がしいだけに、静かだと調子が狂う。

紅葉の葉が、ゆっくりと地に寄せられる。

無音の廊下に、ざあ、と風の音が揺れた。

秋の庭は綺麗で、舞い散る葉が何処か切ない。

どうか。

その紅葉を見ながら、想う。

どうか彼が幸せになれますように。

近くに行く事が出来なかったあたしは、せめて遠くからあいつの幸せを願おう。

ものすごく不器用な、二人の幸せを……。  
さよなら、あたしの恋。

「う……」

じわり、と目が潤んだ。

「小野寺!?!」

「うああああ」

あたしは泣き続ける。

子供みたいに、みっともない位の大声で。

子供みたいに、みっともない位の大声で。

この恋は、すごく苦しかった。

でも、終わりもやっぱり、苦しい。

泣く度、胸の奥がずきりと痛む。

今度はもっと、楽しい恋がしたいな。

一緒に笑い合えるような。

坂下は何も口を挟む事なく、あたしの側にいてくれた。

変に慰められるより、その方がずっといい。

「ありがと、坂下。もう大丈夫」

あたしは下ろしていた鞆を掴み、玄関へ向かう。

「小野寺!」

「?」

「こんな時に言うのって反則かもしれないけどさ……」

放課後の薄暗がりから覗く坂下の顔は、どこか赤い。まるで、紅葉のように。

「俺、ずっとお前が」

「さあ。風が鳴る。」

今度は、楽しい恋がしたいな。

## 第二十六話：もらった勇氣と電話

響いていた足音も消えた、薄暗い教室の中。

僕は遙の何を見てきたんだろっ、と思う。

心中でまた、ごめん、と言いつつになつたのを堪えた。大きく息をついて、僕は立ち上がる。

そうして、玄関を出て、帰路を辿つた。遙と鉢合わせしてしまわないように、思い切り回り道をして。

こういつとき、幼馴染というのは難しい。何しろ、家がすぐ近くで、家族ぐるみの付き合いなものだから、頻繁に会う。

そう、遙は僕にとって『家族』だったんだ。

小さい頃からずっと一緒に、「遙って、妹じゃなかったの?」という質問をしたくらいに。

まるで双子のきょうだいのような、そんな存在だったんだ……。

歩道に敷き詰められた落ち葉が、足の下でかさりと音を立てた。

\*

「ただいま」

「お帰り。明日は母さんとこだからね」

妹が返事をする。

明日は墓参りか……。

僕はどさりと、自分の部屋のベッドに倒れこむ。

もう、あれから七年になるんだな。

あの日もこんな風に、色づいた葉っぱが風に散っていた。

「……」

僕は携帯を取り出した。

それは、アドレス帳の一番上で、簡単に呼び出すことができる。

しかし、今までにそのアドレスにメールを入れたり、電話をかけたりしたことは無かった。

少し迷ってから、通話ボタンを押して電話をかける。

携帯画面に表示された名前は、『秋庭さん』。

無機質なコール音が一回、二回と、鳴るたびに緊張を高まらせた。

「もしもし」

「もしもし、秋庭さん」

「上城君？」

僕はほっと息をつく。

「どうしても訊きたい事があって」

『幸せになつて』、と遙は言った。『それじゃなければ許さない』  
、とも。

遙に、勇気をもたらった。

臆病な僕はずっと訊けなかつたけれど、秋庭さんに訊かなければならない事がある。

「僕と付き合ったのは『話しやすい』からですか？」

第二十七話・空の机と見つけた本心（前書き）

秋庭さん視点です。

## 第二十七話：空の机と見つけた本心

「え……」

『僕と付き合ったのは、く話しやすいからですか？』  
違う、と言いかけて、止まった。

付き合ってくれと言われ、話しやすい事を理由にしたのは確かなのだから。

でも、とつさに答えが出てこない。

「はい、それじゃあ、また……」

電話が切れた後の、ツー、ツーという無機質な音が、いつまでも電話の奥から鳴り響く。

ツー、ツー。

それはまるで、私と上城君との距離が途切れてしまったよう。

\*

「坂下のばーか、なんなの昨日の？ つくにしてももつとましな冗談についてよね」

「冗談じゃねーよ！ 俺は本気で……」

「うるさい、馬鹿」

教室に入ると、坂下君と小野寺さんがいつものように騒いでいた。いつもと変わらない光景に、私はほっとする。

「あ、おはよう秋庭さん」

「おはようございます」

大河内君に挨拶を返す。教室をぐるりと見回すけれど、上城君の姿は無い。まだ来てないのかな……。

「あれー、上城まだ来てない？ 秋庭さんが来たよー」

「蓮なら休みよ。だって今日……」

小野寺さんの答えに、私を除く三人の間で納得したような空気が

流れた。

何かなんだかわからない私に、大河内君が説明してくれる。

「今日は、……上城のお母さんの命日なんだ。それで毎年この日はお墓参りに行って……」

「そうなんですか……」

お母さんの命日、お墓参り。

全然知らなかった。何もかも、上城君のこと、私は何も知らなかった……。

なんだか、その日はいつもより気が重い。

上城君は休みだとわかっているのに、気が付くと、目が上城君の席を見ている。

その空の机には、今日幾ら待っても彼が座る事はないけれど。

『僕と付き合ったのは、<話しやすい>からですか?』

ああ、そうか。

やっとわかった。彼が学校を休んで、初めて。

咄嗟に話しやすいということを理由にしたのは、只の言い訳。上城君より話しやすい人は他にもいる。

むしろ、上城君といると何故だかいつもより、緊張してしまうから、話しにくいとも言えた。でも。

「私は上城君と話したかったんだ……」

其れを小声で口にし、明確に答えを出した瞬間、もやもやと燻っていた胸のうちが急速に澄み渡った。

何で話したかったの?

自分への、答えのわかっている問いかけ。

それは、私が。

ノートの隅に、小さく「好」という言葉を書きかけ、誰にも見られないうちに消しゴムで消した。

## 第二十八話：線香と二文字の言葉

ふわりと、線香の独特な匂いが薫る。

見渡せば一面に、背の低い灰色の墓石が並ぶ、今年もこの場所にやって来た。

ここは昔から、どうも苦手だ。

「アニキ、マッチ

「ん」

琳<sup>りん</sup>からマッチを受け取り、しゅっ、と擦る。そして、蠟燭に火を点けた。

線香を蠟燭の先端に近づけると、一瞬赤く火が灯り、白い煙が風に流れ出す。

その煙を見ながら、ふと、そういえば秋庭さんの笑顔を最初に見たのは、坂下達とマッチの話をしていた時だったな、と思った。

ずいぶん前の事になるんだな。

あの頃はまだ春。そして今は 秋。

秋庭紅葉という名前のせいか、この季節、どこにいても秋庭さんを思い出してしまう。

「あー……カッコ悪いな……」

僕はどうしてこんなにカッコ悪いんだろう。

必死で君を追いかけて、手を伸ばそうとして、勇気がないから引っ込めて。

自分がかつとカッコ良かったら、秋庭さんの事も、こんなに悩まずに済んだだろうに。

「？ 拝まないの？」

「ああ、うん」

一回頭の中を振り切って、手を合わせる。

母さん、久しぶり。

今年はずいニューズがあるんだ。

好きな子が、出来たんだよ。

そこで、僕は彼女にまだ言っていないなかった事があるのを思い出す。  
日本語で、たった二文字。

だけどそれを言う勇氣がなくて、告白はしたものの、その言葉をわざと避けていた。

秋庭さんの気持ちは、僕にはまだわからない。

それでも、もう後ろには戻れないんだ。秋庭さんが僕のことをどう思っていたとしても、そこで逃げて全部無かった事になんて、もう出来ない。

だから。

\*

次の日の放課後、僕は秋庭さん呼び出す。

二文字の言葉を、伝えに。

## 第二十九話：円周率とあたたかい目

『放課後、裏庭に来てください』  
僕は秋庭さんに、そう言った。

\*

うわ　！

何言っちゃったんだ、自分は。しかも、よりによって朝に。これじゃ放課後まで一日中気まずくなるじゃないか。せめて終礼の直前とかにしとけば良かった。

「か、み、し、ろ、クンっ」

「坂下……」

鳥肌たったぞ、今の声。

坂下は満面の笑顔を浮かべていた。

「何だその顔……」

「あたたかい目」

お前らはドラ　もんか？

大河内がぼん、と僕の肩に手を置いてくる。

「お前の雄姿はしかと見届けたぞ！」

「の　太クン、頑張れ」

誰かの　ただ誰が！　……じゃなくて、見られてた　！？

「放課後、うらに……がはあっ！」

僕は人生最速の動きで坂下にヘッドロックをかけた。

「何かな坂下君？　何を言おうとしてるのかな？　返答によっちゃ永遠の眠りに……」

「まで上城！　話せばわかる！」

「坂下、僕の記憶力にかけて君の事は忘れない……円周率の様に無限の馬鹿パワーを持っていた君を……」

「何を言ってる大河内いいいい！」

坂下が叫ぶ。僕は腕に力を入れた。

「ギブギブ！ 今まさにデッドオアアライブ！」

何かホントにやばそうだったので一端離れた。ガホッと坂下が咳き込む。

「でもさ、もうこれ以上恥ずかしい事はないだろ？」

大河内がにやりと笑う。

確かに、告白予告を友人に聞かれる以上に恥ずかしい事なんて、そうはないだろうけども。

「だから大丈夫だよ。落ち着いて告白出来るさ」

「……」

「俺たちは陰ながら見守ってるぜ！」  
見守るな。

\*

刻一刻と、時間は過ぎていく。それなのに、今日という日は今までで一番長く思えた。

「蓮」

「遙……」

「坂下に聞いたよ」

おのれ、坂下。

うつ向いている遙の表情は読み取れない。あれから、何となく気まづくなってしまった。

お互い口を開かないまま、その場はしばらく沈黙に支配される。

「あのさ」

「あのね」

しまった、八モった。

遙は吹き出す。

「あははっ先にいいよ」

「えっと……頑張るよ」

もつとまじな事は言えないのか自分。  
けれど、遙は笑顔を浮かべた。

「頑張れ、上城 蓮！」

ばしん、と遙は背中を 叩く。

「あたしも、頑張るから。あたしの好きな、秋庭さんに恋してる頑張り屋の蓮でいて」

「……うん」

ありがとう、遙。

「終礼始めるよー！」

先生の声。

進み出す時計は時間の到来を告げる。  
放課後は、すぐそこ。

第三十話：時計の針と自分の気持ち（前書き）

秋庭さん視点です。

### 第三十話：時計の針と自分の気持ち

私は、手に持っている文庫本のページに目を落とす。

けれど、ただ無意識に印刷されている文字列を追うだけで、内容がぜんぜん頭に入っていない。

「あ……」

しまった、また読んでいるところがわからなくなった。

はあ、とため息をついて、私はページを戻した。さっきからその繰り返しで、まったくページは進んでいない。

しかたなく本を読むのをあきらめて、やることのない私は机に突っ伏した。

『放課後、裏庭に来てください』

なんでこんなに、この言葉が気になるんだろう。

朝、上城君にそう言われてから、頭にのこったまま、離れない。

本を読んだら紛れるかと思っただけど、それも無理だった。

上城君が言ったから？

上城君の言葉は、不思議。私と同じで喋るのが上手い方じゃないんだけど、なんだか、すごくあったかい。どうしてだか、とても安心する。

放課後、か。

いつもあつという間に過ぎていくと思っていた時計の針は、今日に限ってすごくゆっくりで。

なんでそういうことを朝に言うんだろう。気になって気になって仕方ない。でも、その場で言わずにわざわざ呼び出すんだから、きっとすごく重要なことなんだと思う。

告白……はこの前されたよね。じゃあ、今度はなんなんだろう。もしかして。

最悪の予感が身をよぎる。

私のこと、嫌いになったとか？

それならありえるかもしれない。だって、いつも不安だったから私なんかでいいの？ って。

もしそうだったらどうしよう。私はどうしたらいいんだろう。上城君に嫌われるのだけは……。

突っ伏した身を少し起こして、教室の中にいる上城君を探した。いつものように、坂下君や大河内君とふざけあっている。

そういえば、前にもこんなことがあったな。

私が教室で本を読んでいたら、なんだか楽しそうな声がして、そっちに目を向けたら、上城君がいた。

確か、あの時は新学期が始まったばかりで、まだ上城君の名前も知らないときだった。

けれど今、窓の外には、桜の花びらの代わりに、落ち葉が散っている。

もう、秋なんだ。

今の状況は、季節が違うだけであの時とほとんど同じ。同じ、はずだけど……。

なんでだろう。あの時と比べ物にならないくらい、上城君の存在が、私の中で大きくなって。

最初は、他の人より話しやすい友達だった。次は、自分から話したいと思う人だった。でも、今は？ 今は……。

思えば、私から自分の気持ちを上城君に言ったことはなかったな。告白だって、上城君からだった。私はまだ、何も言っていない……。

私は、上城君のことをどう思ってるの？  
最後の質問を自分にしてみる。考えるまでもなかった。うん、もう答えはわかってる。まだ、伝えてないだけで。

もしかしたら、上城君は私のことが嫌いになっちゃったかもしれないけど……。もう、終わりなのかもしれないけど。

それでも、自分の気持ちを言ってみよう。

私は、そう決めた。

放課後に向けて、時計の針は相変わらずゆっくり進む。

## エピローグ：告白と掃除当番

賑やかな生徒の音が、窓の向こう側から、そこは対照的に静かな外まで響いてくる。

さくさくと、絨毯のように道に敷き詰められた落ち葉を踏み鳴らしながら、僕は裏庭に向かって歩く。

長かったな。

たくさん戸惑った。迷った。悩んだ。

誰かを好きになった事なんか今までなかったから。

それでも、やっとここまで来れた。

今僕が歩いている落ち葉の道の中に、あの日　最初に秋庭さんに告白した日に、樹にくっついていた葉っぱも混じっているんだろうか。

もしそうなら、少しは成長したってことかな。

そうであるならいい。

秋庭さんは、彼女らしく時間通りにそこで待っていた。

突然呼び出したせいかな、少々戸惑ったような表情をしている。

「あ、上城くん」

「もう告白はしたんですけど、これだけは言っておきたくて」

とても謙虚な彼女を不安にさせないために、伝えなきゃいけないことがある。

いつの間に彼女は、僕の中でこんなにも大事な存在になったのだらう。

半年前から、僕は秋庭さんのことをもうずっと、どうしようもなく。

「好きです」

最初はちょっととっつきにくいかなあ、と思ってたけど、実は笑

顔がすごく素敵で。

とても綺麗な名前をしていて。

曲の趣味はちょっと渋い。

お兄さんはとても怖いけど、悪い人ではなくて。

秋庭さんの一挙一動に、何もなかったはずの僕の心は大きく揺り動かされる。

ずっと溜めてきたその二文字を告げた瞬間、秋庭さんは一瞬、大きく目を見張った。

確認するように僕の目をじっと見て、ほんの少しだけ、泣きそうな表情になっ

秋庭さんは、微笑った。

僕の恋した、彼女の笑顔そのままに。

「本当はその台詞、私が言おうと思ってたんですよ」  
くすくすと秋庭さんは笑う。

「先に言われてしまいました」  
今、なんて？

秋庭さんも言おうとしてたっ。。  
相手が、自分と同じことを考えていた。

それは偶然起こったときでさえ、とても嬉しいことなのに、その考え事が、まさか揃いも揃って相手に伝える言葉なんて。

それがわかっただけで、自然と頬が緩む。

これ以上に嬉しい事は、多分この先そうそうない。

「あ、そういえば今日掃除当番でした」  
「え」

掃除当番！？ またか！ またなのか！

僕の一世代の勇気をかけた日は、常に秋庭さんの掃除当番と重なるらしい。

頼むよ神様、空気、読んで……。

「……じゃあ、また、後で……」  
「いいです」

え？ 今度は、僕が首を傾げる番だった。

「一度さぼって見たかったんです」

秋庭さんはいたずらっぽくそう言った。

普通の適度に不真面目な生徒にとってはなんでもないその行為が、彼女にとっては憧れになってしまふところが、いかにも秋庭さんらしい。

「……上城くん、私とつきあってくれますか？」

ああ、ほら。やっぱり秋庭さんは、僕の心を弾ませるのが上手いんだ。

「喜んで」

真面目な彼女の、最初の掃除さばりに付き合おう。

ようやく想いを伝えた達成感にこみ上げたため息は、ぐっと堪えて吐かずにおいた。

ほんの少しでも、この幸せを逃さないように。

彼女の名前と同じ、紅葉の舞い散る秋の庭。

風はそろそろ冷たくなってくる頃合だけれど、どちらからともなく繋いだ掌は暖かい。熱い。

そうして。僕らは一緒に歩いていく。

## あとがき

まずは、最終話を残して一年も更新を止めてしまったことの謝罪と、ここまで読んで下さった方々へ言い尽せない程の感謝を。

応援して下さい下さった方々のおかげで、ここまで書くことが出来ました。

一話で告白してふられてしまうへタレな主人公と、謙虚な眼鏡っ娘の近寄りたり離れたりする話は、ひとまず終了です。

結局手を繋ぐところまで精一杯でしたね（笑）

この作品は、小説家になろうに登録してすぐの頃に書き始めたもので、文章は拙いし変な箇所もたくさんあります。

おまけに、恋愛ジャンルも、主人公の一人称も初めてでした（笑）

しかし、このときの文章は多分今じゃ書けないものだと思うので、一年越しの完結にあたって、あえて手を加えていません。（酷い誤字は直すかもしれませんが・汗）

そのまんま成長記録のような作品です。一話からラストまでの間に、少しは成長できていればいいなあ、と思います。

途中、坂下と大河内を書くのがあまりに楽しかったので、恋愛ものを止めて友情コメディに突っ走ろう、そうしよう、と血迷ったこともありました（笑）

そのうちスピンアウトで坂下と遙の話や、大河内と数学嫌いの女の子の話などを書きたいな、という野望があるので、また見掛けることがありましたら、そのときはよろしくお願いします。

それでは、どうもありがとございました。書きたいな、という野望があるので、また見掛けることがありましたら、そのときはよろしくお願いします。

そねどは、じまがとていねごまじだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4287a/>

---

あきのにわ

2010年10月15日22時47分発行